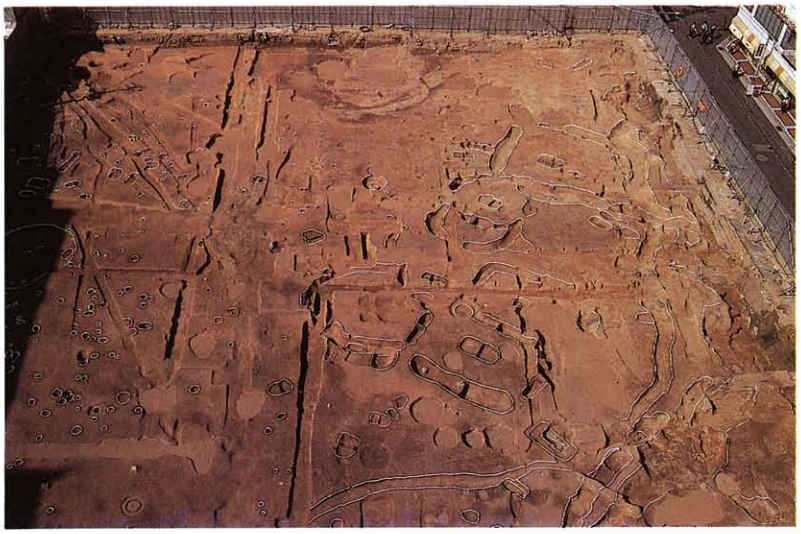
昭和62年度　遺跡現地説明会資料

神戸市教育委員会

1.　郡家遺跡　竪穴住居址　SB06　L字形のカマド

2.　郡家遺跡　弥生時代後期集石墓　SX01



3.　雲井遺跡　弥生時代中期方形周溝墓

4.　雲井遺跡　周溝墓 6 主体部木棺検出状況

5.　戎町遺跡　弥生時代前期水田址

6.　戎町遺跡　河道内 出土編物

7.　西神10地点遺跡出土石製人面

8.　天王山5号墳　埋葬施設

9.　上小名田遺跡　掘立柱建物 SB01～02

10.　上小名田遺跡　掘立柱建物柱根残存状況

11.　生田遺跡　掘立柱建物と竪穴住居址

12.　生田遺跡　竪穴住居址１

目　　次

郡　家　遺　跡 …… 1

雲　井　遺　跡 …… 13

戎　町　遺　跡 …… 23

西神ニュータウン内遺跡 …… 35

天王山古墳群5.6号墳 …… 53

上小名田遺跡 …… 69

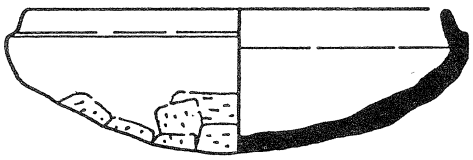
生　田　遺　跡 …… 81

表紙は，雲井遺跡現地説明会風景

郡家遺跡

城の前地区第２４次調査

現地説明会資料

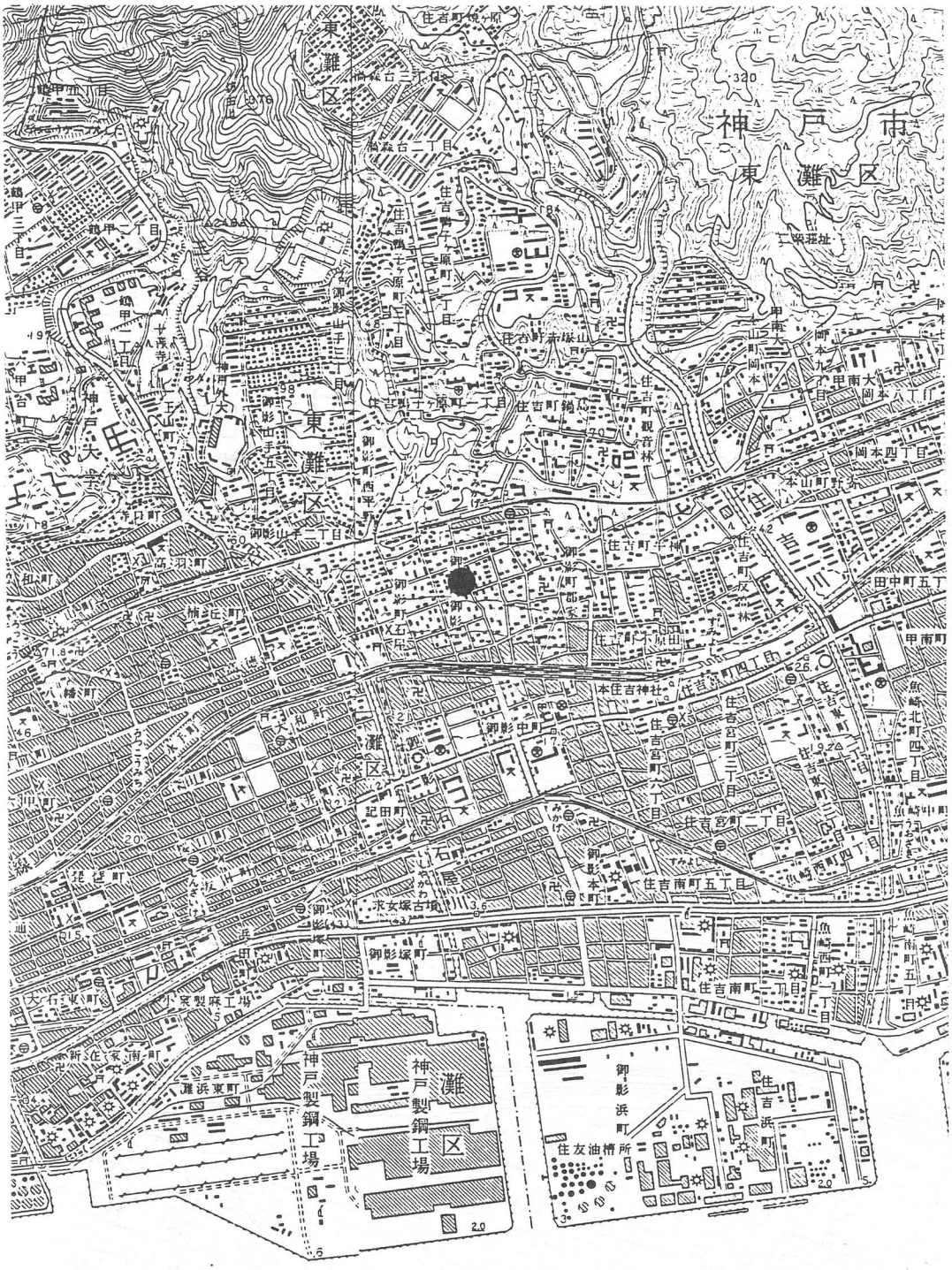


昭和６２年５月３０日

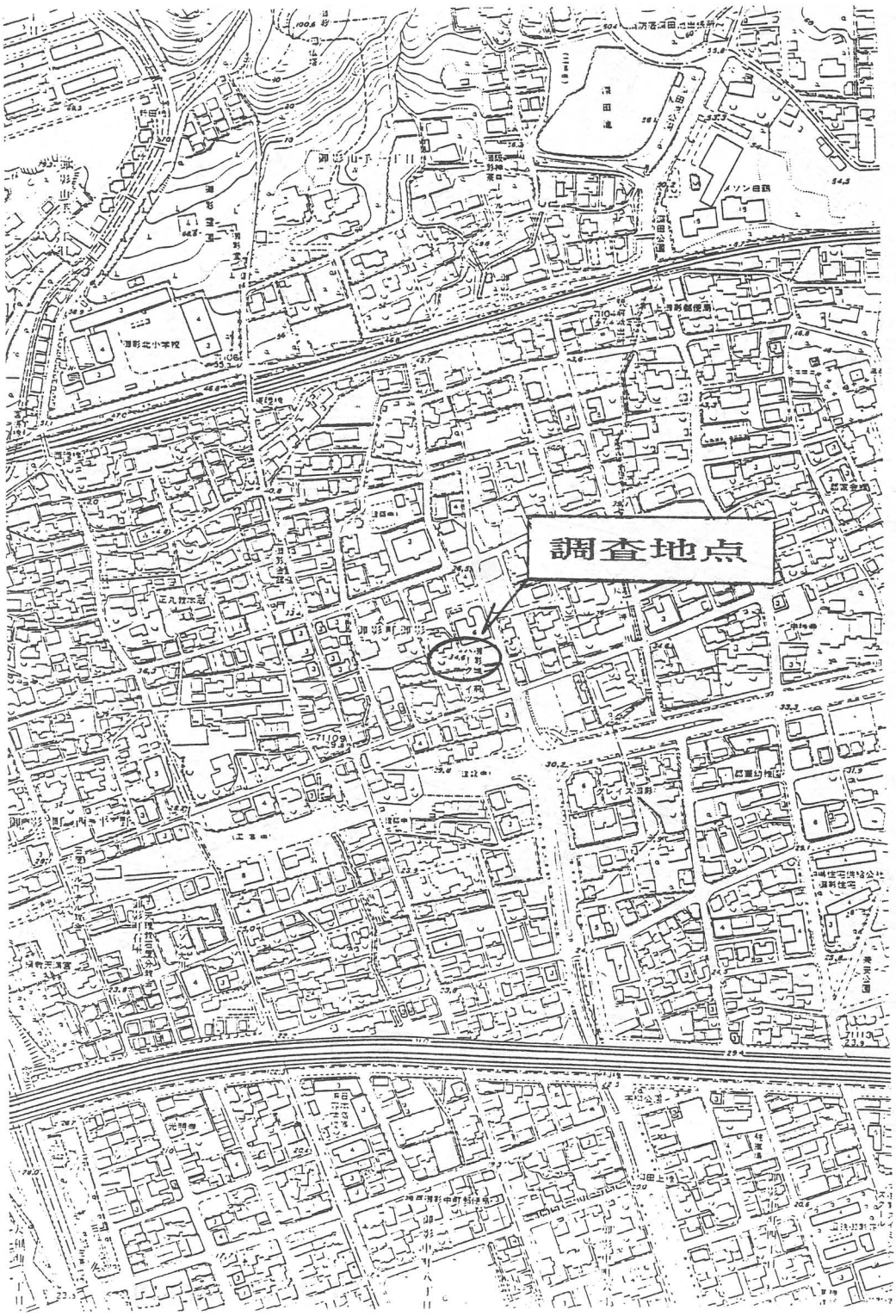
神戸市教育委員会

今回の調査に際しまして、神戸市文化財専門委員の小林行雄・宮本長二郎・檀上重光の三先生に御指導いただきました。

また、土地所有者の黒正國廣氏の御協力を得ました。


神戸市
東灘区
住吉町
御影
本住吉神社
住吉南町
住吉浜町
御影浜町
住友油槽所
神戸製鋼工場
灘区
灘浜東町
新住吉南町
小寄製麻工場
求女塚古墳
御影塚町
記田町
御影中町
住吉宮町
住吉東町
住吉南町五丁目
魚崎西町
魚崎北町
甲南町
田中町五丁目
本山町野寺
岡本四丁目
甲南大学
住吉町観音林
住吉町鍋
住吉町赤塚山
住吉町宇佐
住吉町反
住吉町木原田
住吉町四丁目
住吉宮町三丁目
住吉宮町六丁目
住吉宮町二丁目
御影山手二丁目
御影山手三丁目
御影町西郷
御影町郡家
御影石町
高羽町
八幡町
八幡通
石屋川
甲南一丁目
甲南三丁目
甲南山手
甲南八丁目
甲南九丁目
岡本八丁目
住吉川
住吉東町
住吉南町
住吉浜町
魚崎南町五丁目
魚崎西町四丁目
魚崎北町四丁目

調査位置図


調査地点

1.はじめに

当遺跡は、神戸市東灘区御影町御影・郡家を中心に広がる大規模な遺跡です。

今日も地名として残る「郡家（ぐんげ）」は、古代の「郡衙（ぐんが）」の存在を暗示するものであり、小字として残る「大蔵（おおくら）」は、郡衙の正倉（しょうそう）をさすのではないかと考えられてきました。

昭和54年度大蔵地区で初めて発掘調査を行い、以後今日まで30数次にわたります。

2.今日までの成果

昭和54年度以来、たび重なる発掘調査によって、郡家遺跡の実体は、徐々にではありますが、明らかになりつつあります。

当遺跡は、弥生時代後期に始まり、近世に至るまで連綿と人々が住み続けています。

弥生時代後期から、古墳時代初頭にかけては、集落はまだ小さく、しかも居住域と墓域はすぐ近くにありました。

古墳時代中・後期になると居住域は広がり数多くの竪穴住居と掘立柱建物が出土しています。これらの建物は当時流れていた川の近くの段丘斜面に位置していますが、規則正しく並ぶ掘立柱建物だけで構成された特殊な建物群が段丘の高い所にあります（下山田地区）。

この時期の墓域はこれまでに発見されていませんが、北方段丘上の鴨子ケ原（かもこがはら）群集墳や南東の沖積地上の坊ケ塚、住吉宮町遺跡の古墳群と関係があるかもしれません。

菟原郡衙と深いかかわりをもつと考えられる奈良から平安時代の建物は、大蔵地区で出土しているだけです。その南の御影中町でも遺物は発見されていますが遺構は明らかでなく、大蔵地区にその中心があるようです。

平安・鎌倉時代の掘立柱建物や井戸は、古墳時代後期の居住域と重なるように点々と出土しています。しかし、当時の集落の中心となるような部分はまだ確かめられていません。

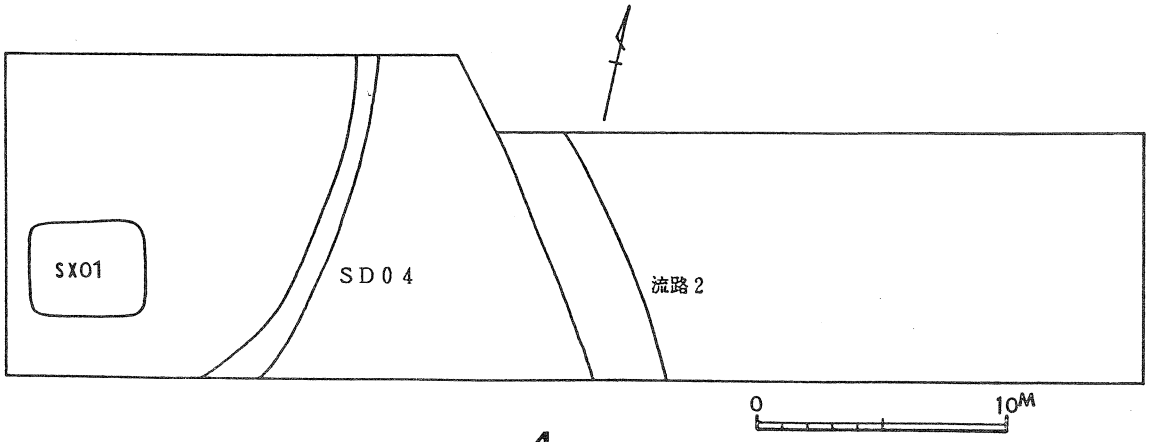
以上が今日までに知り得た当遺跡の概要ですが、今後もっと詳細な資料分析が進めば、遺跡の性格を具体的にお知らせできる日がくるでしょう。

3.調査の概要

弥生時代後期

今回の調査地区内では遺物・遺構とも少なく、溝１条（ＳＤ０４）と用途不明の集石遺構（ＳＸ０１）があります。

ＳＸ０１は、4.5 m×4.0 mの長方形に掘りくぼめた穴の中に石（主に花崗岩）と土器が多量に積み上げられたものです。これらの石や土器は、自然に流れ込んで堆積したものではなく、人為的にこの場所に置かれたものです。



古墳時代後期

竪穴住居址３棟（ＳＢ０４・０５・０６）と掘立柱建物１棟（ＳＢ０７）が発見されました。

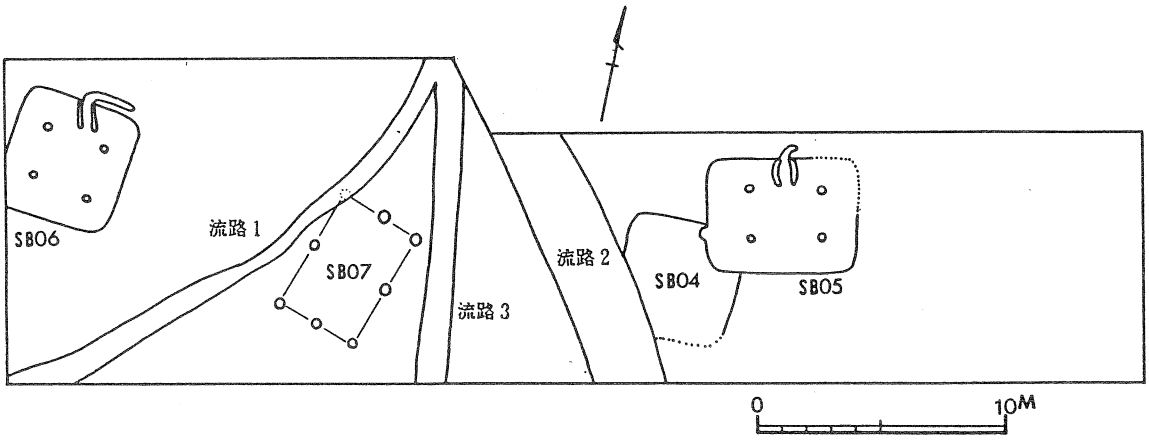
この中ではＳＢ０４が古く、６世紀前半のもので一辺4.7ｍの方形です。

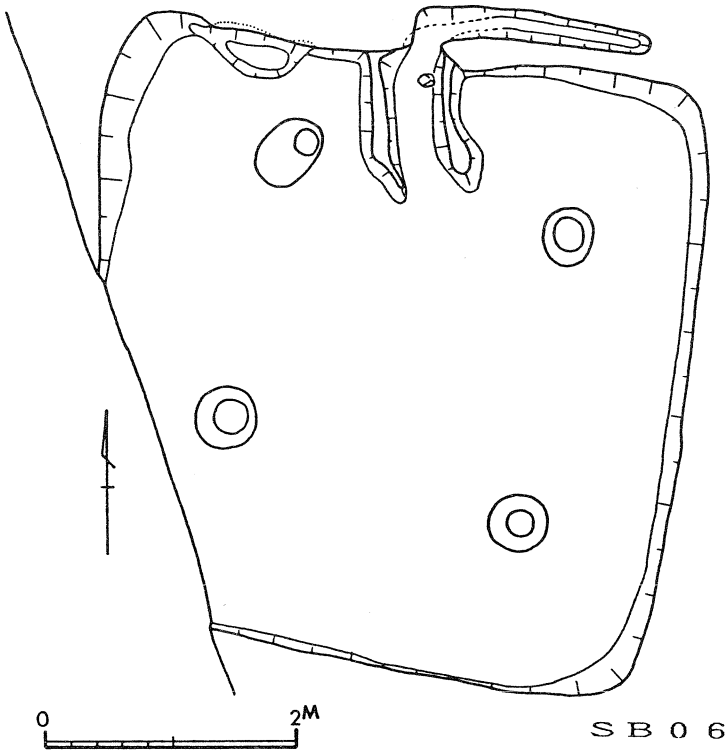
住居址内からは、土器の他に滑石（かっせき）製の臼玉が出土しています。

ＳＢ０５は、4.7 ×5.7 ｍの長方形で、６世紀前半のものです。北側の壁際（かべぎわ）にカマドを造っています。煙道（えんどう）は、壁の外に出てやや東に曲がっています。多くの土器の他に鉄器が出土しています。

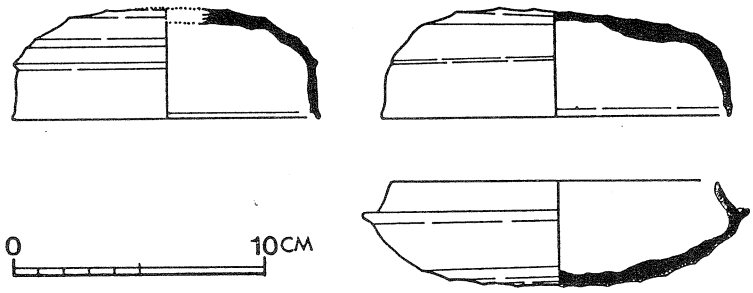
ＳＢ０６は、一辺 4.8mの方形で、６世紀後半のものです。ＳＢ０５と同様に、北側の壁際にカマドを造っています。煙道は、トンネルで住居址の外へ出て、東へ曲がり、幅約20cm、深さ約 5～10cm、長さ 1.8mの溝で残っています。

ＳＢ０７は、２間×２間の掘立柱建物です。出土遺物から古墳時代に属することは判明しましたが、それ以上の詳しいことは不明です。





ＳＢ０６平面図

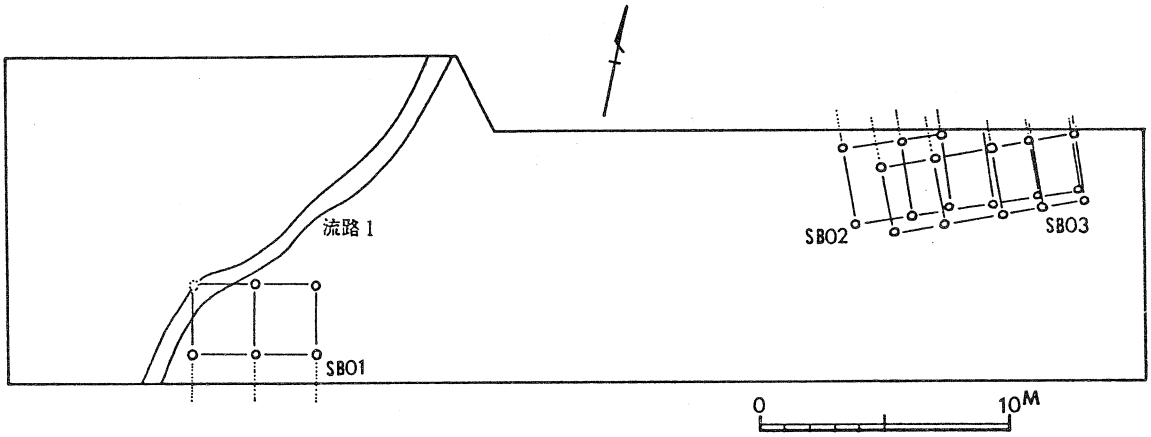


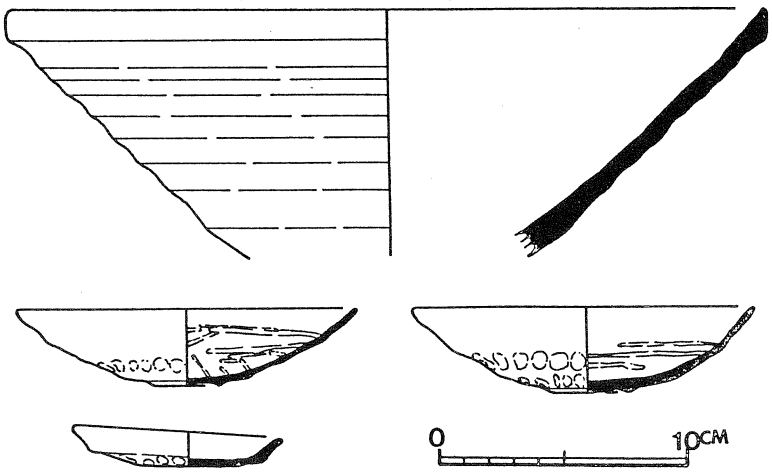
１．ＳＢ０５　２，３．ＳＢ０６

鎌倉時代

掘立柱建物３棟（ＳＢ０１・０２・０３）が出土しました。ＳＢ０１は、２間×１間以上、ＳＢ０２は、５間×１間以上、ＳＢ０３は、４間×１間以上で、全体規模を知り得るものはありません。

柱穴のいくつかから土器が出土していますが、柱を建てる前に置いたものや、柱を抜いた後に置いたものがあります。

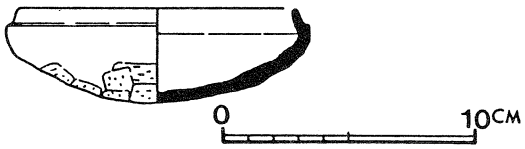




鎌倉時代柱穴出土土器

以上の遺構の他に、自然の流路が３条あります。流路１・３は一時に多くの水が流れ出た時についたものらしく、流路２は弥生時代から流れ出し、細くなったり太くなったりしながら古墳時代以降まで流れていたようです。

なお、流路３から出土した須恵器は、５世紀中頃のもので、神戸市内では最も古い例になります。



流路３出土須恵器

まとめ

今回の調査で最も注目されるのは、ＳＢ０６につくられたカマドで、煙道がＬ字形にまがっているものです。同様の煙道は、城の前地区第23次調査（ＳＭ23）ＳＢ０２・０３でも見つかっています。この２つの煙道は、竪穴住居址の壁に沿って粘土を盛り上げて造っていましたが、今回のＳＢ０６は、竪穴の外に溝を掘っています。竪穴の外といっても屋根の裾の内側で、屋内であるという点ではＳＭ２３のものとかわりありません。

ＳＭ２３のＳＢ０２・０３は、６世紀初頭のもので、今回のものとは約半世紀の時期差があります。その間に煙道の造り方が変化したようです。

なぜ、煙道をＬ字形にしたのかよくわかりませんが、奈良国立文化財研究所の宮本長二郎先生によりますと、

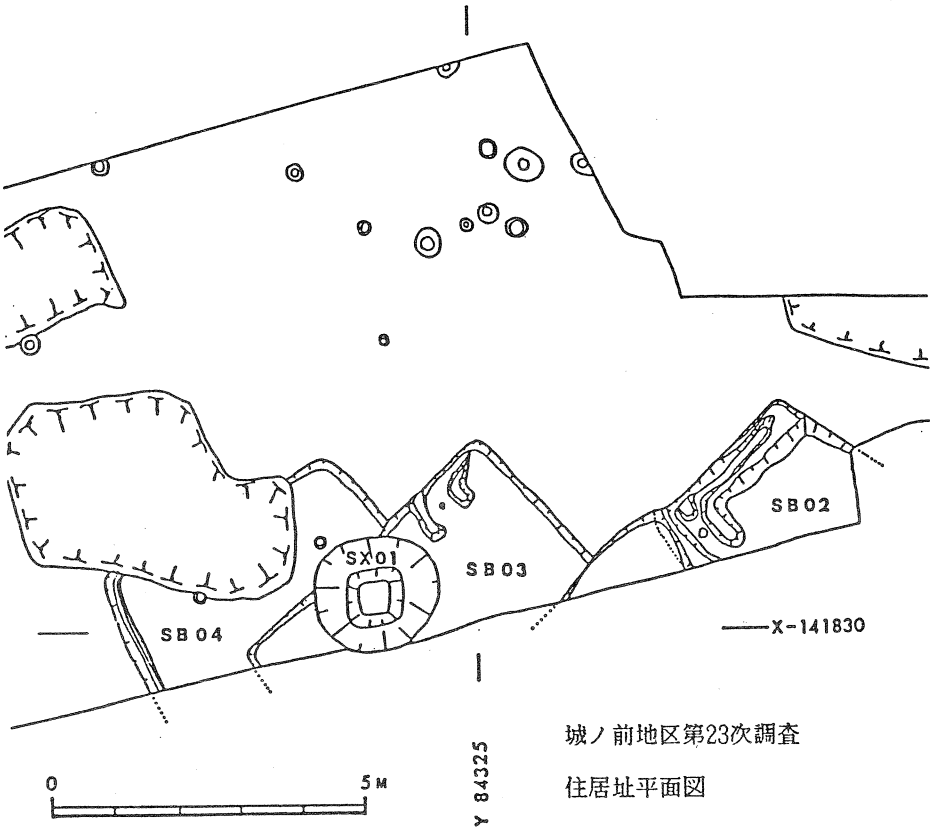
Ⅰ，煙道は長いほど煙のひきがよい。

Ⅱ，まっすぐ外へのばすと屋外に出る部分が長く壊れやすい。

Ⅲ，Ｌ字形に曲げるのは、オンドルの古い形態にみられるもので、それにヒントを得たのであろう。（この時代、朝鮮半島から多くの渡来者がありました。）

とのことです。

今後、このような形態のカマドがどのように分布するのか、また京都府北部でよく似たものがあるが、どのように関連するのか検討すべき課題です。

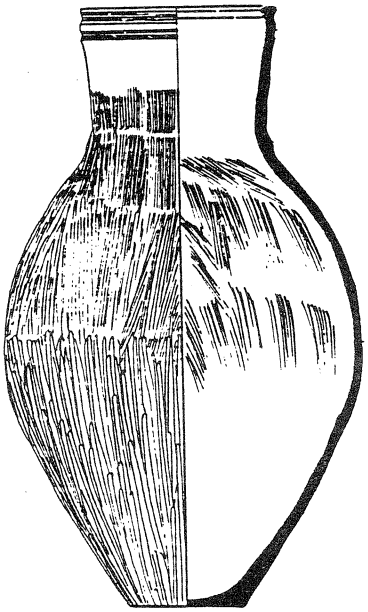


城ノ前地区第23次調査

住居址平面図

雲井遺跡

現地説明会資料



昭和６２年８月３０日

神戸市教育委員会

☆　今回の調査を実施するにあたっては、神戸市都市計画局・
雲井通６丁目地区市街地再開発組合の協力を得ました。

1　はじめに

雲井遺跡は、雲井通６丁目地区市街地再開発事業に先立つ試掘調査によって新たに発見された遺跡です。

試掘調査では現地表下約70cmの所で溝状の遺構の中から弥生時代中期後半の壷型土器が発見されました。

今回の調査は昭和62年６月から発掘調査を始め，現在までに弥生時代前期の遺構と弥生時代中期後半の墓址が見つかっています。

当遺跡が最近まで知られなかったのは、このあたり一帯が，神戸市内でも最も早くから市街化していた所の一つで、民家や商店街の下に遺跡があることに気づかなかったためです。

今回の調査面積は再開発事業の敷地約4,000㎡を対象に行っています。

2　周辺の遺跡

先土器時代

神戸市内の先土器時代の遺跡はあまり多くなく中央区内では遺跡は，まだ発見されていません。市街地に近いところでは会下山遺跡（兵庫区）でナイフ形石器が採集されています。

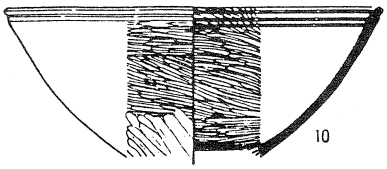
縄文時代

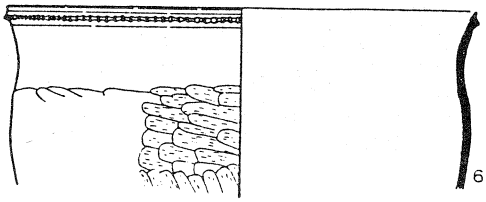
宇治川南遺跡

中央区内の縄文時代の遺跡としては，宇治川南遺跡があります。宇治川南遺跡では、縄文時代早期から縄文時代晩期までの多数の土器や石器が出土しました。

これらの土器の中には、東北・関東地方の土器と思われるものがあります。また、大分県姫島産と考えられる黒曜石が晩期の土器に伴って出土しています。当時の広範な交流関係を知るうえで重要な遺跡です。

このほかにも最近の調査で確認された縄文時代の遺跡に、神戸大学医学部構内遺跡（後期）や五番町遺跡（晩期）があります。



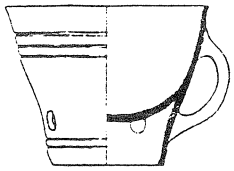


1

周辺の主要遺跡
（s＝1/25000）
1．雲井遺跡
2．日暮遺跡
3．生田古墳群跡
4．布引丸山遺跡
5．生田遺跡
6．黄金塚古墳
7．宇治川南遺跡
8．神戸大学医学部構内遺跡
9．楠・荒田町遺跡
10．ハーバランド内遺跡
11．兵庫津遺跡

2

弥生時代



196　兵庫　丸山

弥生時代に入ると、遺跡数も急激に増え、楠・荒田町遺跡，布引丸山遺跡，熊野遺跡・長田神社境内遺跡等が知られています。楠・荒田町遺跡では弥生時代前期から中期前半の貯蔵穴が多く発見されました。布引丸山遺跡は中期後半の山頂の遺跡として古くから有名です。また，熊野神社遺跡では南海産のゴボウラ貝を加工した腕輪が30数個入った壺が発見されました。

古墳時代前期

古墳時代には、夢野丸山古墳・会下山二本松古墳・得能山古墳などの前期古墳が知られています。これらの古墳は、現在破壊されてしまって見ることはできません。

古墳時代後期

後期古墳は北野町付近や脇浜にあったことが、古い記録から知ることができます。

奈良時代
平安時代

奈良時代になると房王寺が建立され、平安時代には、平清盛の別邸「雪の御所」などが造らます。

福原京については、従来、謎となっていましたが、最近、神戸大学医学部の建物の建て替えに伴う発掘調査によって関連する遺構が発見されています。

また，昨年，この近くで日暮遺跡が発見され，平安時代の掘立柱建物が発見されています。

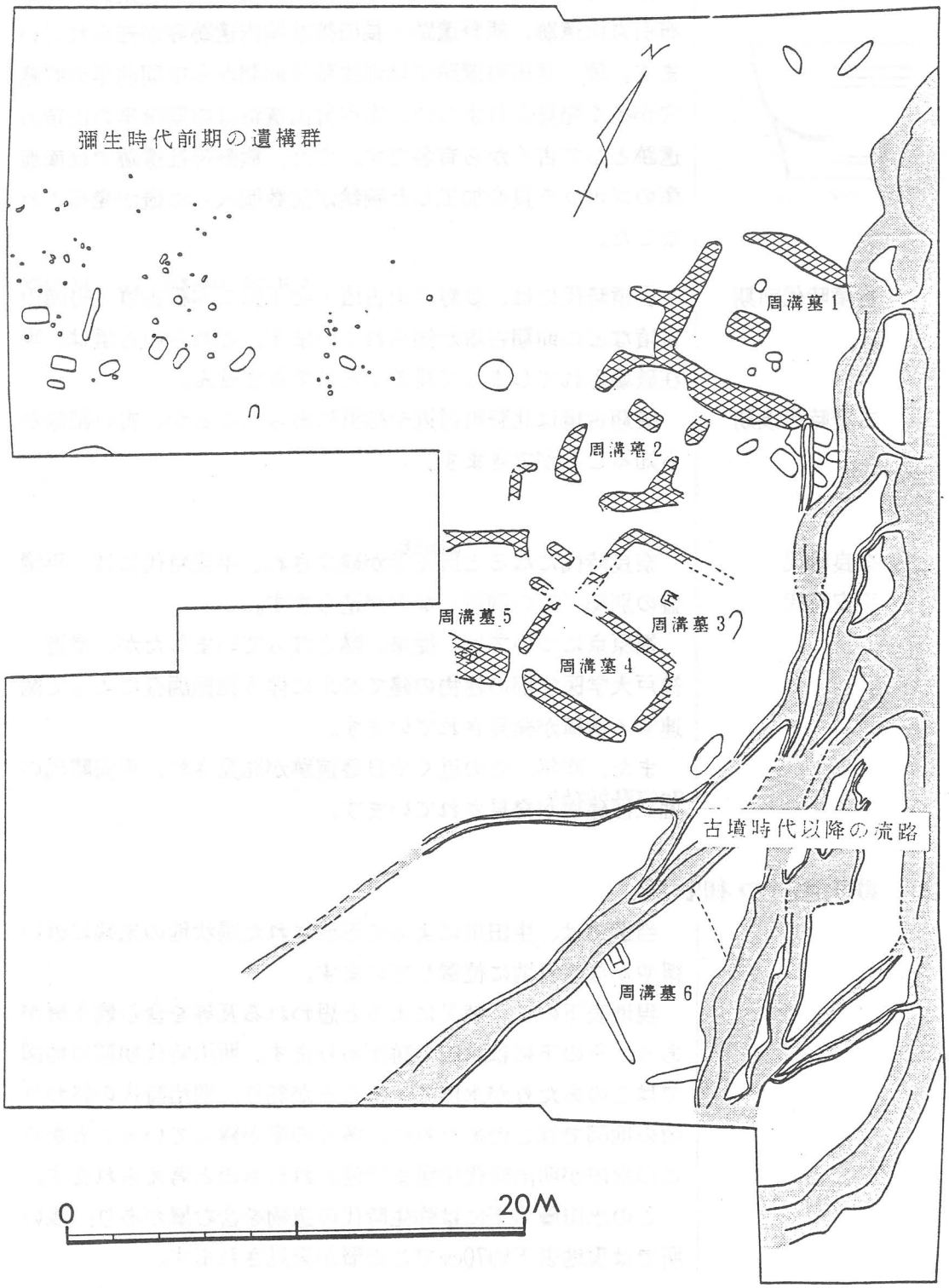
3　調査の概要

当遺跡は、生田川によって形成された扇状地の末端に近い緩やかな傾斜地に位置しています。

現地表下には，戦災によると思われる瓦等を含む焼土層があり，その下には水田の跡があります。明治時代初期の地図ではこのあたりが水田であることが判り，明治時代の終わり頃の地図ではこのあたりに，多くの家が建っていることからこの水田が明治時代中頃まで使われたものと考えられます。

この水田層の下には弥生時代の遺物を含む層があり，浅い所では現地表下約70cmでこの層が発見されます。

雲井遺跡遺構配置図



4

遺　構

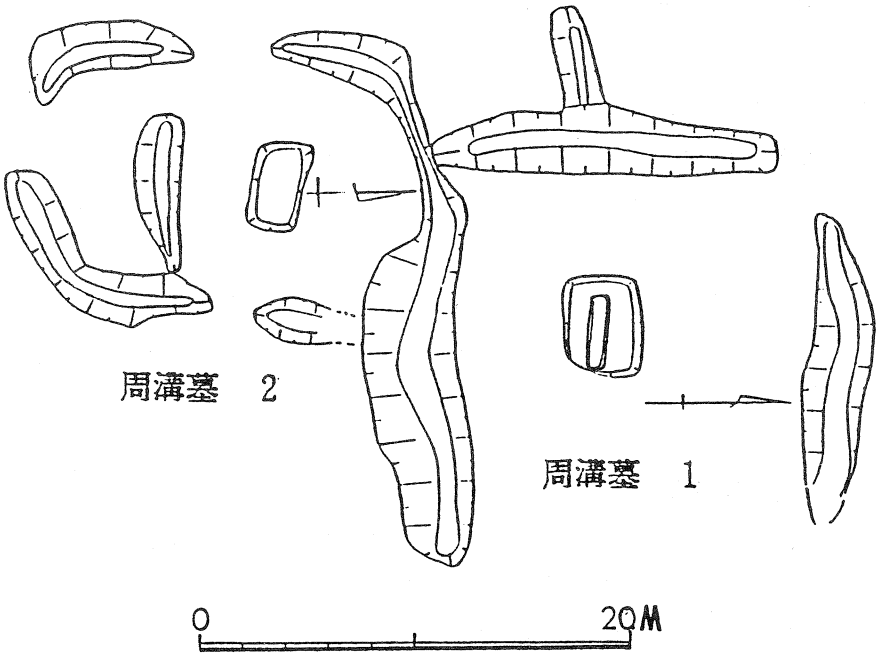
まだ調査中ですが，現在のところ弥生時代中期後半の方形周溝墓６基が発見されています。また，弥生時代前期の土器が出土する，土壙や柱穴も発見されています。

周溝墓　1

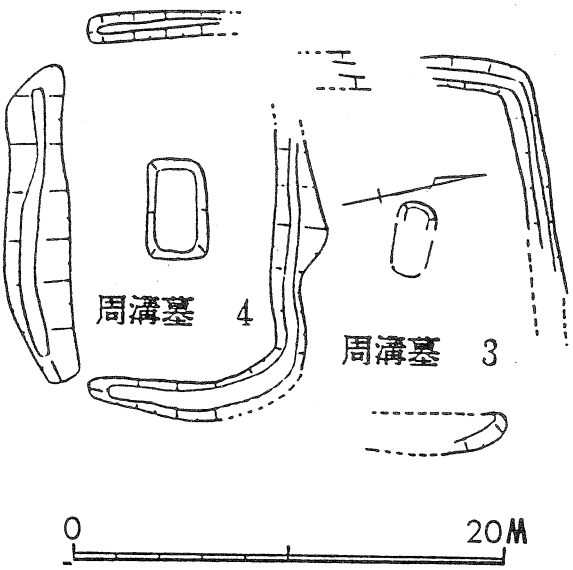
最も北側に位置する周溝墓で東西約１０ｍ×南北約１１ｍのものです。中央部付近に2.4m×2.0mの堀形の中に160cm×50cmの木棺を埋葬しています。周溝の中からは供献された弥生土器（長頸壷・広口壷・高杯）が発見されました。

周溝墓　2

周溝墓１の南に接して造られた東西６ｍ×南北１０ｍのもので2.2m×1.4mの墓壙（ぼこう）が発見されています。周溝の中からは供献（きょうけん）された弥生土器（広口壷・甕形土器）が発見されています。



5



周溝墓　3　周溝墓２の南東に造られた東西8.6 m×南北６mのもので中央部に墓壙が発見されています。北側の周溝中から長頸壺・甕形土器・広口壺が発見されています。

周溝墓　4　周溝墓３の南に接して造られた東西９m×南北６mのもので墓壙は発見されていません。西側の周溝中から広口壺が発見されています。

周溝墓　5　周溝墓４の西に接して造られた東西？m×南北８mのものので墓壙は発見されていません。南側の周溝中には長70cm×幅35cmの木棺が発見されています。

周溝墓　6　他の周溝墓から離れて発見されたもので規模は現在不明です。周溝中及び表面より広口壺・台付鉢形土器が発見されています。また，やや西側によった所で3.2m×1.8mの墓壙の中に150cm×50cmの木棺を埋葬しています。木棺の上部は腐って残っていませんが，底板は良好に残存しています。

弥生前期の遺構

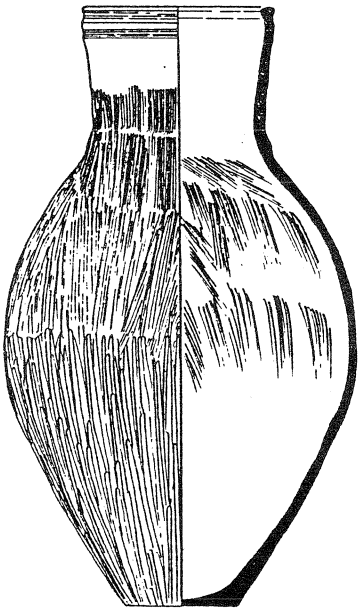
調査区の北西部では直径20cm～30cm内外の柱穴や長方形の土壙が発見されています。この付近で出土する土器は弥生時代前期の土器で，柱穴などは　この時代のものと思われます。現在，調査途中のため詳しいことは不明です。

4 まとめ

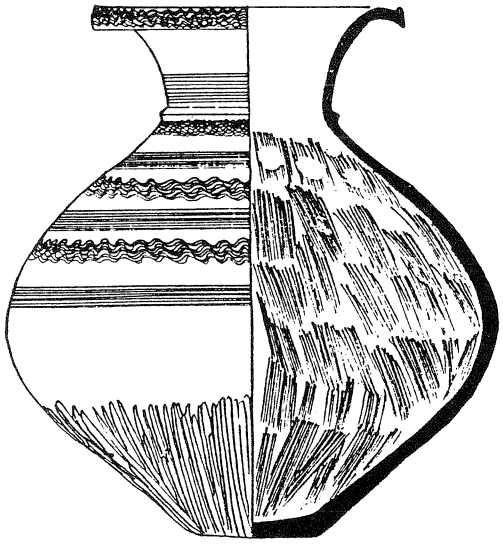
今回の雲井遺跡の発掘調査では，弥生時代中期の周溝墓が群集して発見されました。周溝の中に供献された土器や埋葬された木棺などは当時の墓制や習慣を知る上で貴重な資料と言えるものです。

現在，調査は継続中ですので周溝墓の数は，まだ増える可能性があります。

また，このような市街地の中で，すでに以前の開発により破壊されたと思われていた遺跡が，このように良好な状態で保存されていたことは，今後の周辺の調査によってはこの地域の歴史がより具体的に明らかになるものと思われます。



周溝墓１出土長頸壺
実測図（S＝1/4）

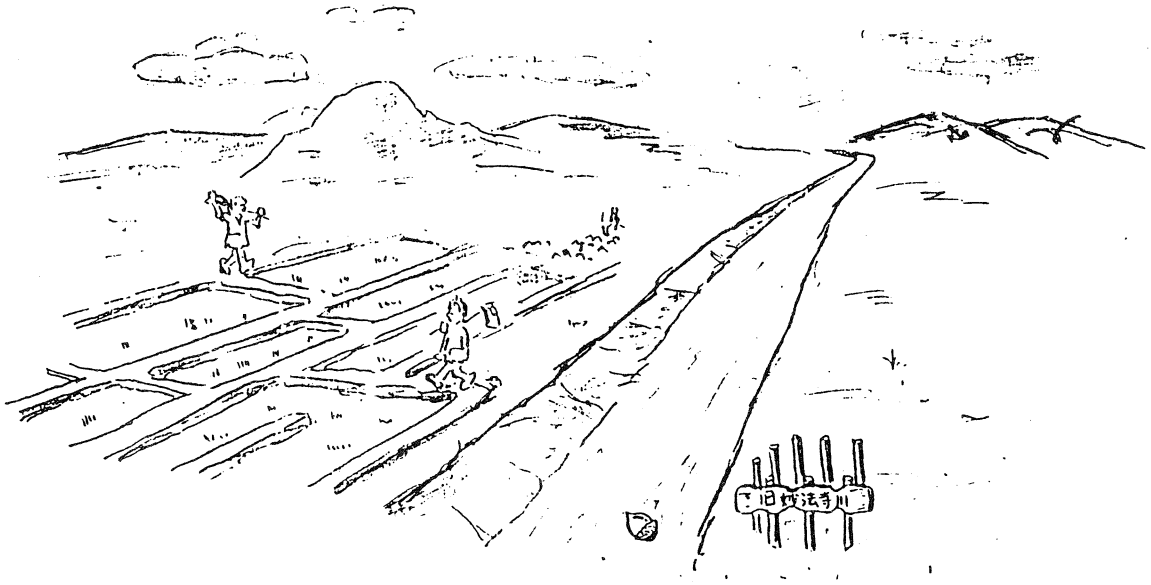


流路１出土広口壺
実測図（S＝1/4）

戎町遺跡

第１次調査

現地説明会資料



昭和６２年９月６日

神戸市教育委員会

今回の調査を実施するにあたっては、大正生命保険株式会社ならびに鹿島建設株式会社の協力を得ています。

また、神戸市文化財専門委員　小林行雄、檀上重光、宮本長二郎の諸先生方に御指導いただきました。

1. はじめに

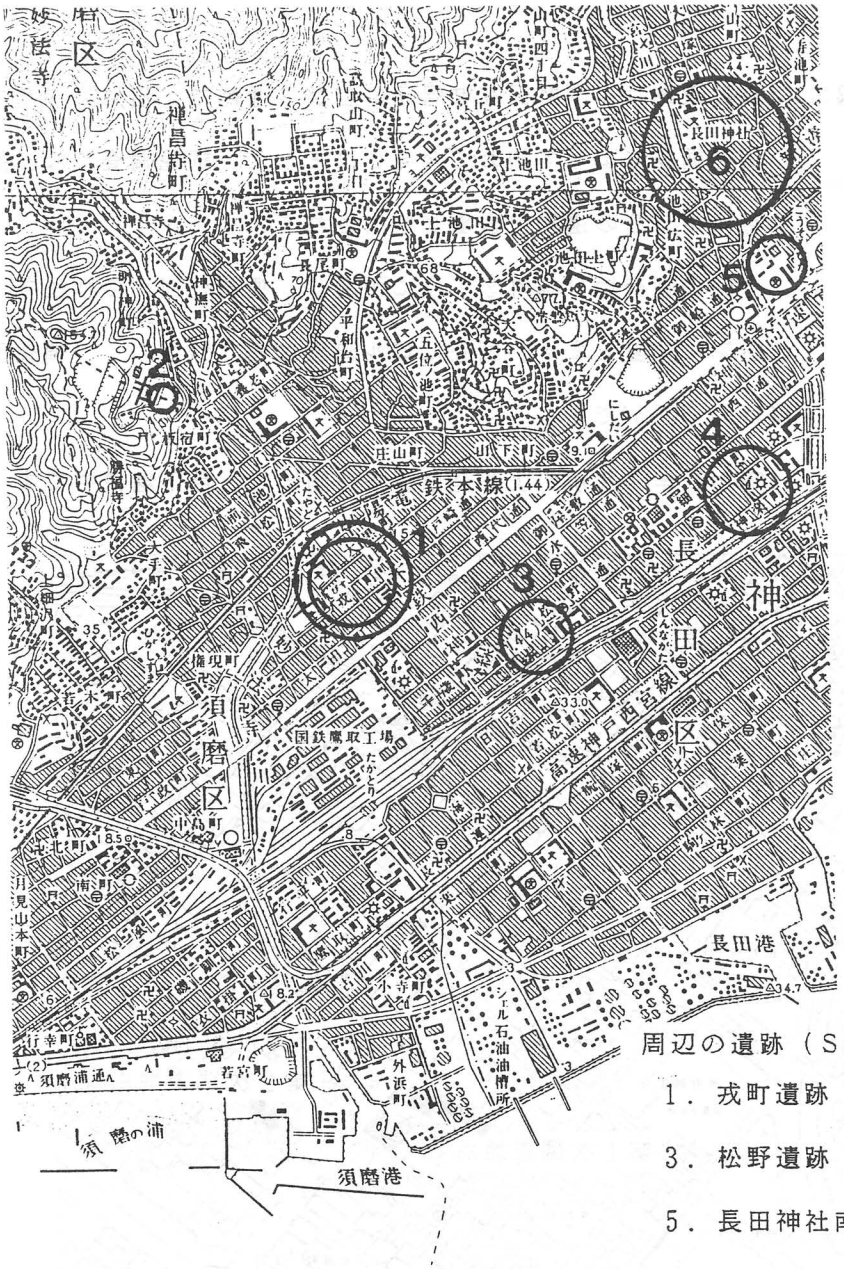
戎町遺跡は、須磨区戎町周辺に広がる遺跡で、昭和61年度末の試掘調査によって初めて発見されました。試掘調査では、弥生時代中ごろの遺物包含層が検出されています。

今回の調査地は戎町３丁目に所在し、標高約14ｍの妙法寺川の左岸に位置します。調査はビル建設に先立つもので、調査面積は約 500㎡です。

昭和62年 6月初旬より発掘調査を開始し、目下継続中です。

調査地点の位置（Scale：１／5000）

周辺の遺跡には、南東約 600ｍの松野遺跡（古墳時代後期）や北西約１kmの得能山古墳（古墳時代前期）などがあります。



周辺の遺跡（Scale：1／25000）

1．戎町遺跡　　2．得能山古墳

3．松野遺跡　　4．神楽遺跡

5．長田神社南遺跡

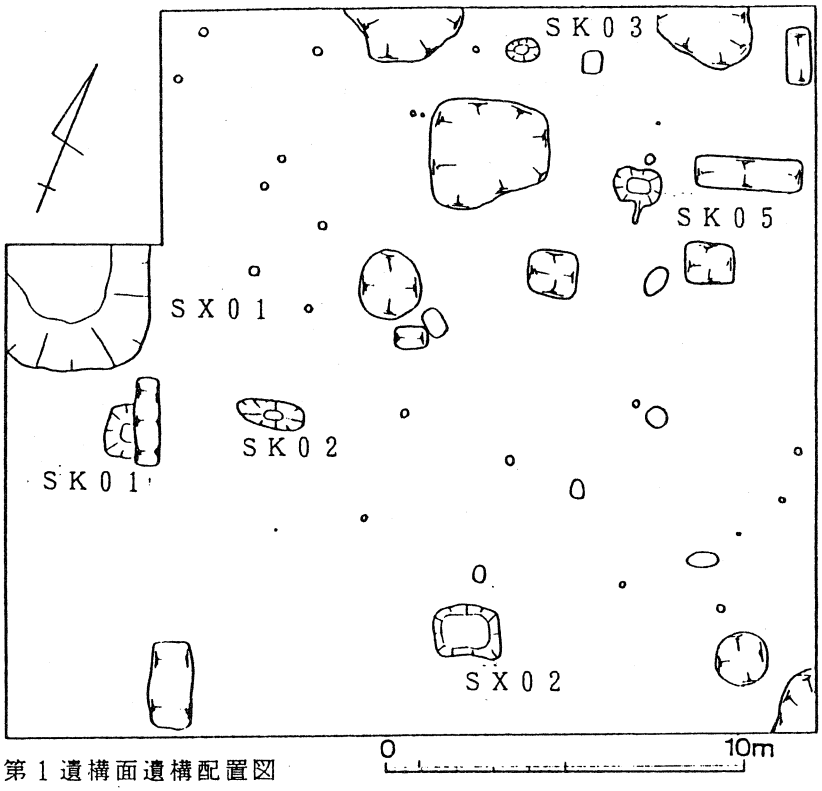
6．長田神社境内遺跡

2．調査の概要

これまでの調査では、弥生時代を通じての4時期の遺構面が確認されました。

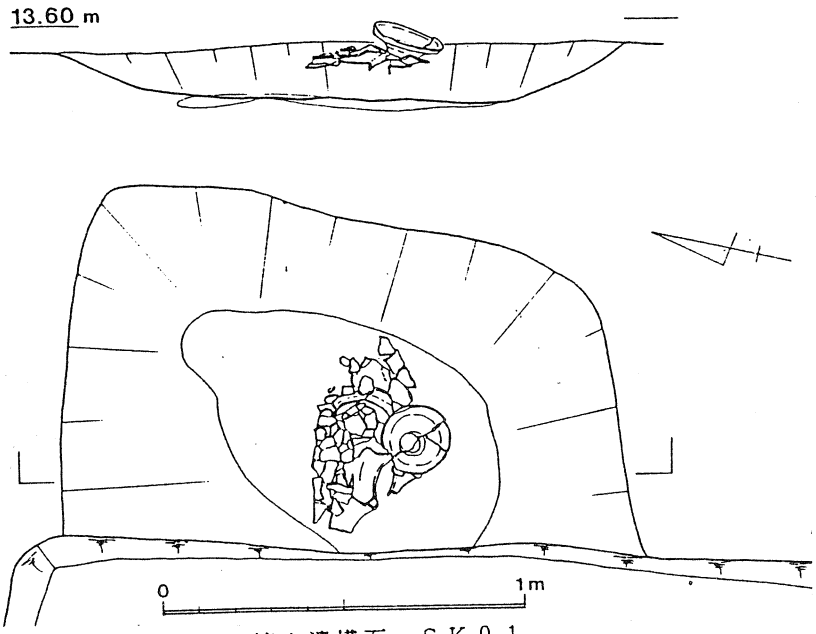
(1)第1遺構面（弥生時代後期末）

現地表下約60cmで確認された遺構面で、土壙5基、ピット26個、不定形落ち込み2基などを検出しました。



第１遺構面遺構配置図

ＳＫ０１は東半が攪乱で壊されていますが、一辺約 160cm、深さ20cmの方形に近い土壙で、高坏の坏部と甕が検出されています。

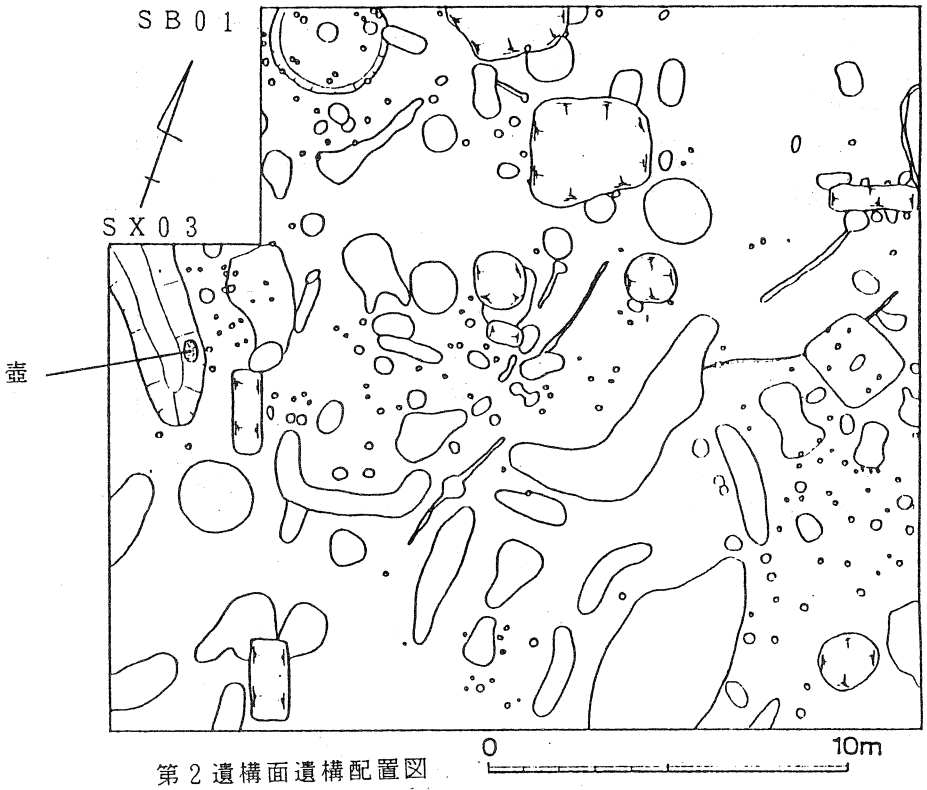


第１遺構面　ＳＫ０１

3

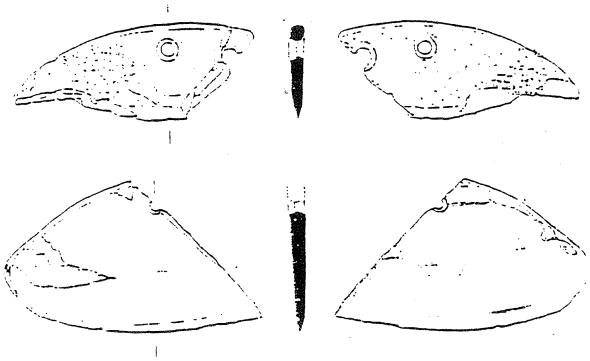
⑵第２遺構面（弥生時代中期中葉）

現地表下約80cmで確認された遺構面で、竪穴住居址１棟（ＳＢ０１）、土壙29基、落ち込み39基、ピット 184個などが検出されています。

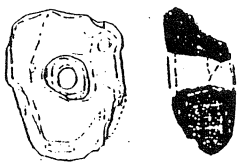


第２遺構面遺構配置図

出土遺物には、多量の弥生土器のほかに、磨製石包丁８点、磨製石斧１点、サヌカイト製刃器１点、サヌカイト製石鏃多数のほか、軽石製浮子などがあります。



磨製石包丁

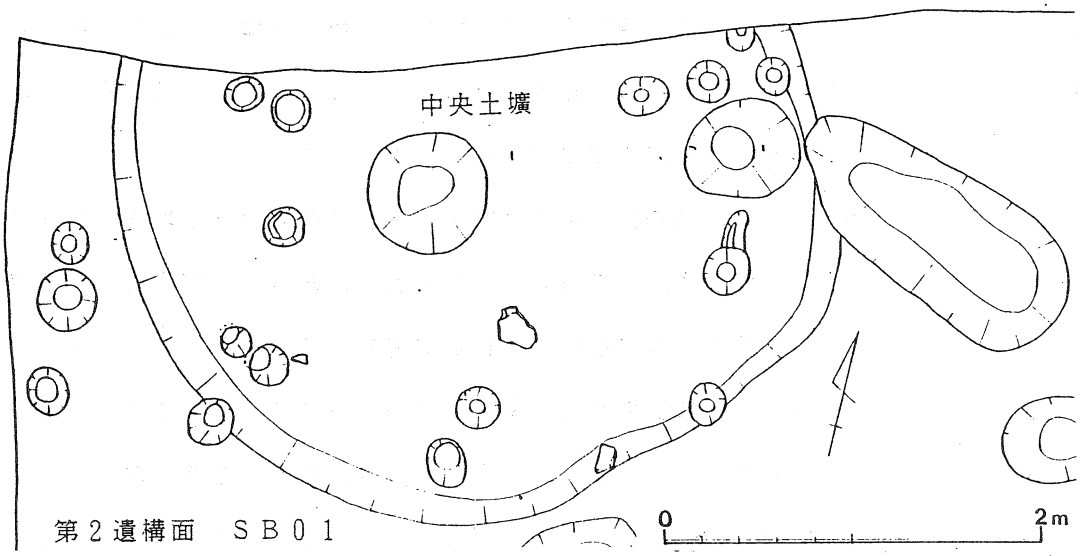


軽石製浮子

（いずれもScale　１／３）

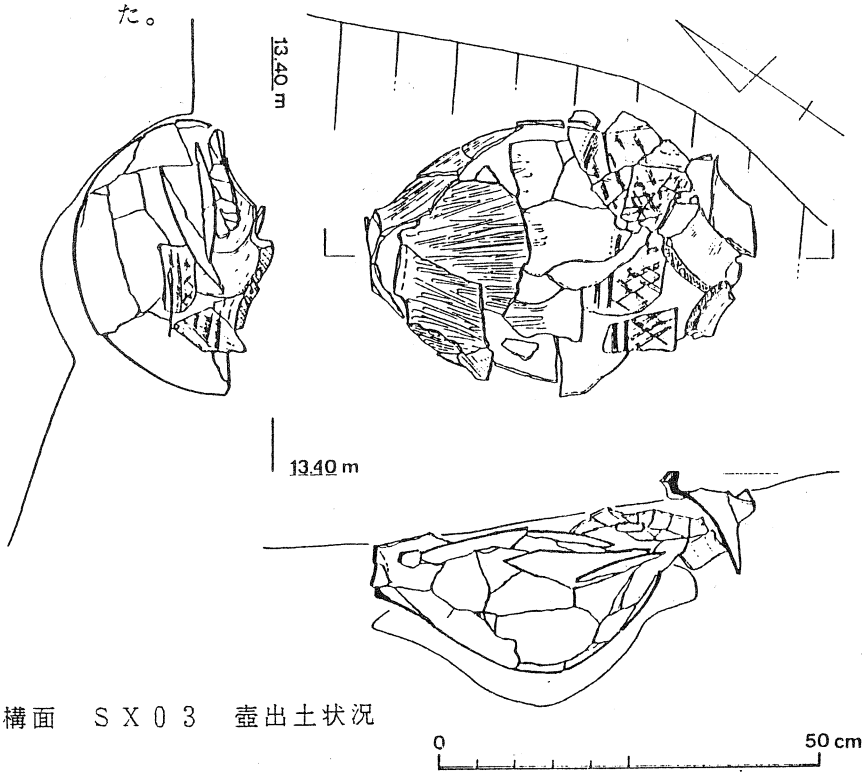
4

ＳＢ０１は直径約 3.7ｍの竪穴住居址で、周壁高は約15cmです。床面には炭や灰のつまった直径60cmの中央土壙とピット13個などとともに砥石が２点出土しています。



第２遺構面　ＳＢ０１

ＳＸ０３は調査区の西端で検出した幅 1.8ｍ、長さ 5.5ｍ以上、深さ50cmの遺構です。東側の斜面には壺が置かれていました。



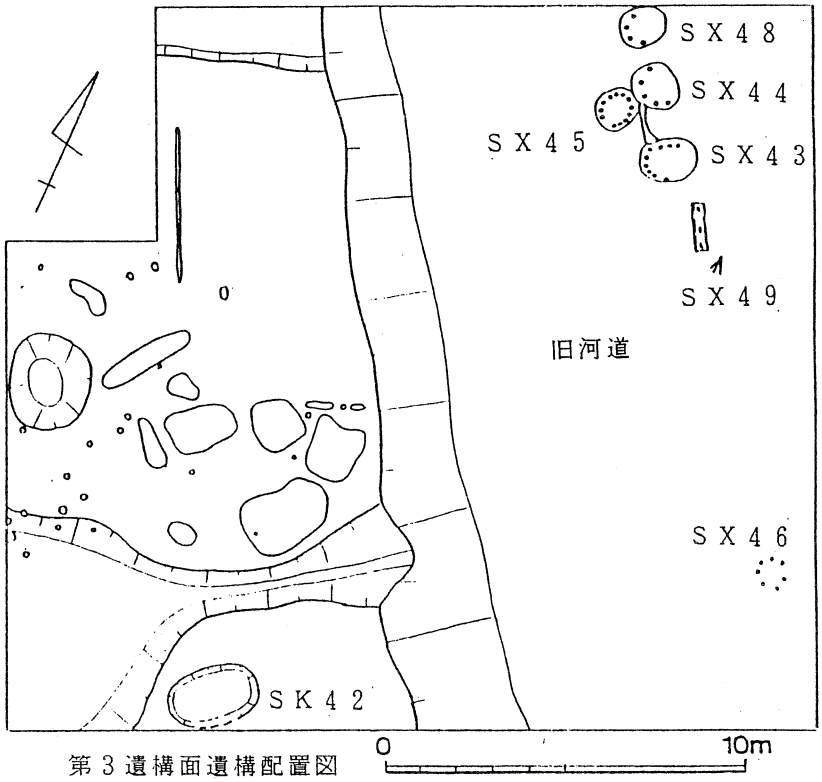
第２遺構面　ＳＸ０３　壺出土状況

⑶第３遺構面（弥生時代前期後半）

現地表下約 150cmで確認された遺構面で、土壙10基、溝状遺構２条、ピット23個が検出されています。

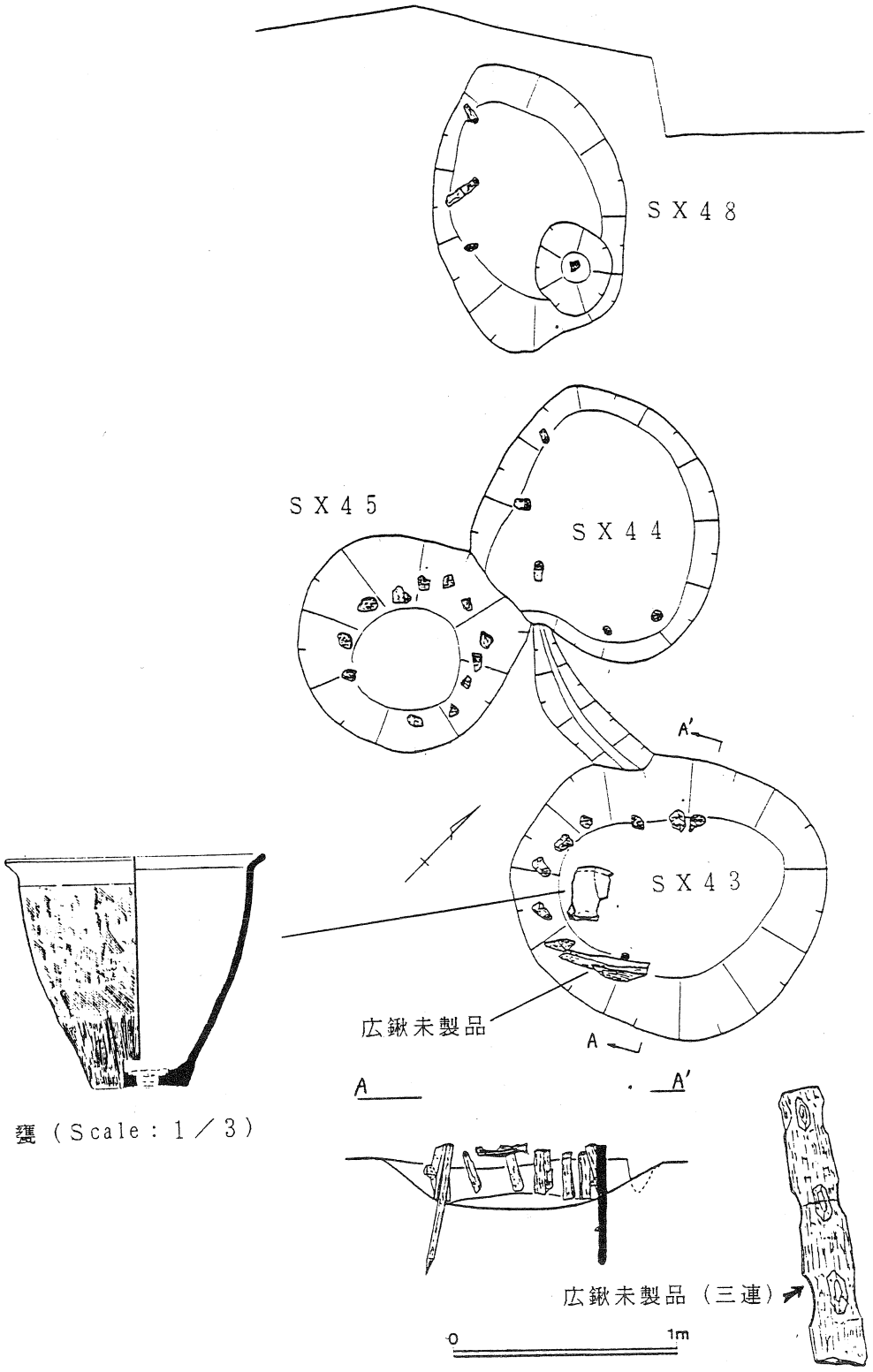
ＳＫ４２は東西 2.5ｍ、南北 1.6ｍの土壙で、壁がほぼまっすぐなことから、貯蔵穴と考えられます。中からは多くの土器に混じって獣骨片なども出土しています。

また、調査区の東半は旧河道で、２回の洪水で埋まったと考えられます。１度目の洪水が終わったあとに、河底にあたる部分に円形に木杭を打った特殊な遺構（ＳＸ４３～４６・４８・４９）が確認されています。このうちのＳＸ４３では、広鍬の未製品が検出され、すぐ南側で広鍬未製品（三連）が検出されています。さらに、少し下層からは広鍬の製品も検出されています。そして、この旧河道内からはほぼ完形の壺や甕が大量に出土しており、磨製石包丁なども出土しています。



第３遺構面遺構配置図

6



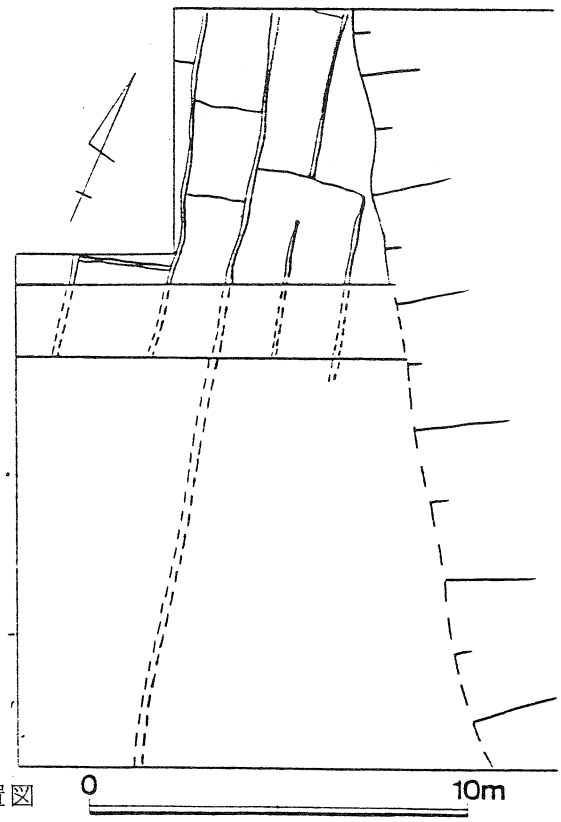
甕（Scale：1／3）

円形杭列遺構と広鍬未製品出土状況

(4)第４遺構面（弥生時代前期後半以前）

現地表下約 200cmで確認された遺構面で、現在調査中です。

幅約25cm、高さ５～10cmの畦畔（あぜ）を数条検出しているところから、水田と考えられます。現在確認している水田は、最も大きいもので２×４ｍ（約８㎡）、小さいものは 1.5×２ｍ（約３㎡）の大きさです。畦畔は南北方向には明確に作られていますが、東西方向はあまりはっきりしない低いものです。



第４遺構面遺構配置図

３．まとめ

今回の調査でわかったことをまとめると、次の４点となります。

(1)これまで全く存在の知られなかった遺跡が板宿で発見され、今回の調査地だけでなく、より広い範囲に拡がる可能性が考えられること。

⑵特に、弥生時代中期には遺構の数や土器などの遺物量からみて、相当大きな集落であったこと。

⑶弥生時代前期後半の旧河道内の円形杭列遺構については性格がはっきりしませんが、全国的にみても例をみないものです。また、遺物では大量の土器が良好な資料であるといえます。そして、特に広鍬は神戸市内では最も古い時期のもので、製作過程のよくわかる資料として重要なものです。

⑷第４遺構面の水田については現在調査中ではありますが、神戸市内で最古は言うまでもありませんが、近畿地方でもかなり古い部類に入る貴重な発見となりました。稲作が日本に伝わってあまり時間がたたない時期の水田と言えますので、当時の稲作を考えていくうえで興味深い資料といえます。

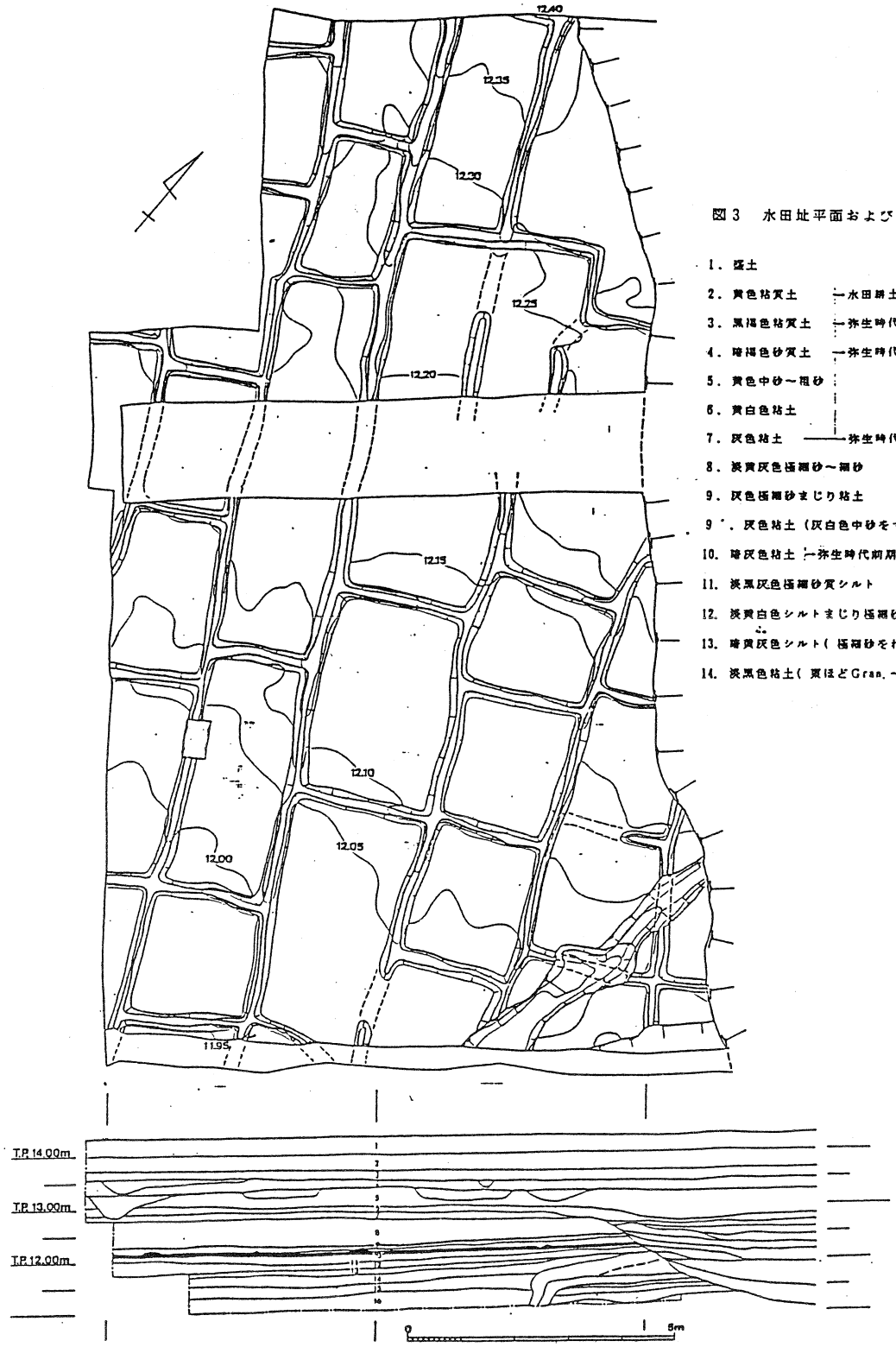


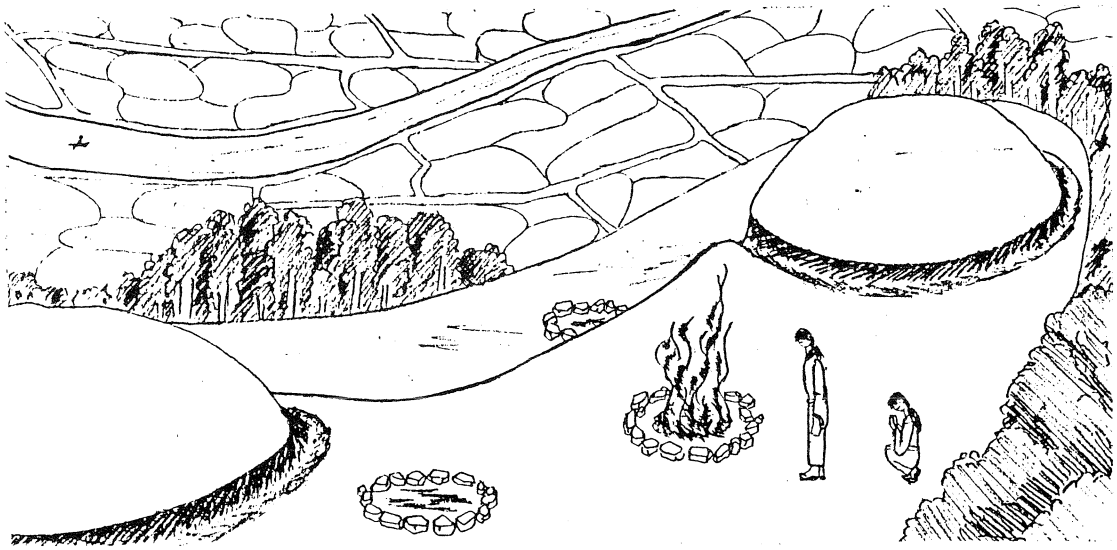
図3　水田址平面および断面実測図

1. 盛土
2. 黄色粘質土 ―水田耕土？（中世か）
3. 黒褐色粘質土 ―弥生時代後期末の遺物包含層
4. 暗褐色砂質土 ―弥生時代中期中頃の遺物包含層
5. 黄色中砂～粗砂
6. 黄白色粘土
7. 灰色粘土 ―弥生時代前期後半の遺物包含層
8. 淡黄灰色極細砂～細砂
9. 灰色極細砂まじり粘土
9'. 灰色粘土（灰白色中砂をマーブル状に含む）
10. 暗灰色粘土 ―弥生時代前期後半以前の水田耕土
11. 淡黒灰色極細砂質シルト
12. 淡黄白色シルトまじり極細砂～細砂
13. 暗黄灰色シルト（極細砂をわずかに含む）
14. 淡黒色粘土（頁ほどGran.～Peb. を多く含む）

西神ニュータウン内

10，11，12地点遺跡

現地説明会資料



1987，10，18

神戸市教育委員会

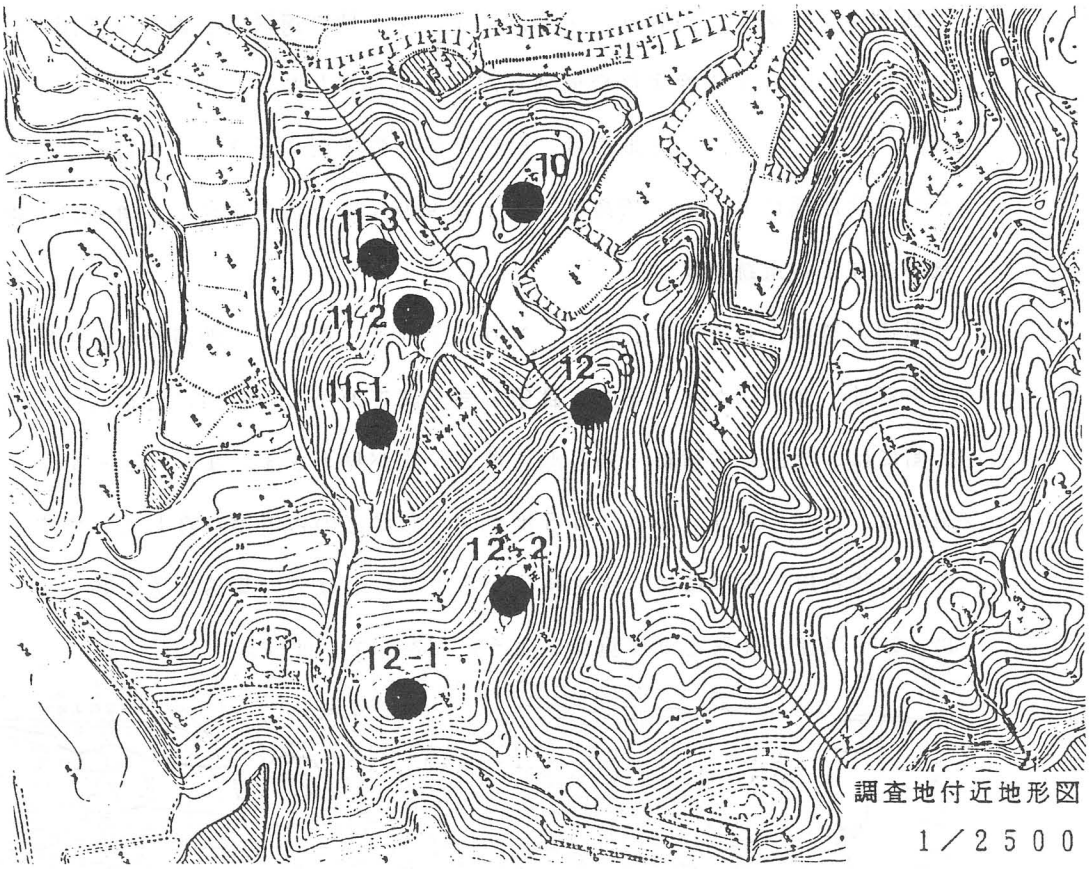
今回の発掘調査にあたっては、神戸市開発局の協力を得ました。

はじめに　西神ニュータウン内Ｎｏ．１０，１１，１２地点遺跡は、西神工業団地の造成に伴い、６１年度より発掘調査が始められました。

Ｎｏ．１０，１１，１２地点は、西区押部谷町養田に所在し、西神ニュータウンの北西隅にあたる、標高約９０ｍ前後の丘陵上に存在する古墳及び中世墓が存在する遺跡です。

周辺の遺跡としてすぐ北側に、Ｎｏ．７地点・養田中ノ池遺跡（弥生時代の集落址）②・③があります。眺望のきく調査地から明石川に目を向けると北側には、七曲り古墳群・鍋谷池古墳⑤・⑥が見えます。またニュータウン側には、Ｎｏ．４０，Ｎｏ．５５地点⑭・⑩などの古墳が存在しています。さらに明石川の両岸には、弥生時代から中世にかけての集落址⑦・⑧・⑨・⑫・⑬が現在の集落とほぼ重なるように存在しています。

周辺遺跡分布図



調査地付近地形図
1／2500

Ｎｏ．１０地点　　Ｎｏ．１０地点は、中世集石墓と古墳が存在する遺跡です。

古墳は、径約１０ｍ、尾根を削り出し、その上に盛土を行った古墳です。周囲には溝をめぐらし、周溝内からは、須恵器，土師器が出土しています。これらの遺物により、６世紀初め頃の古墳と考えられます。

埋葬施設を明確にすることはできませんでしたが、鉄鏃（てつぞく）、刀子（とうす）、鎌（かま）が出土しています。

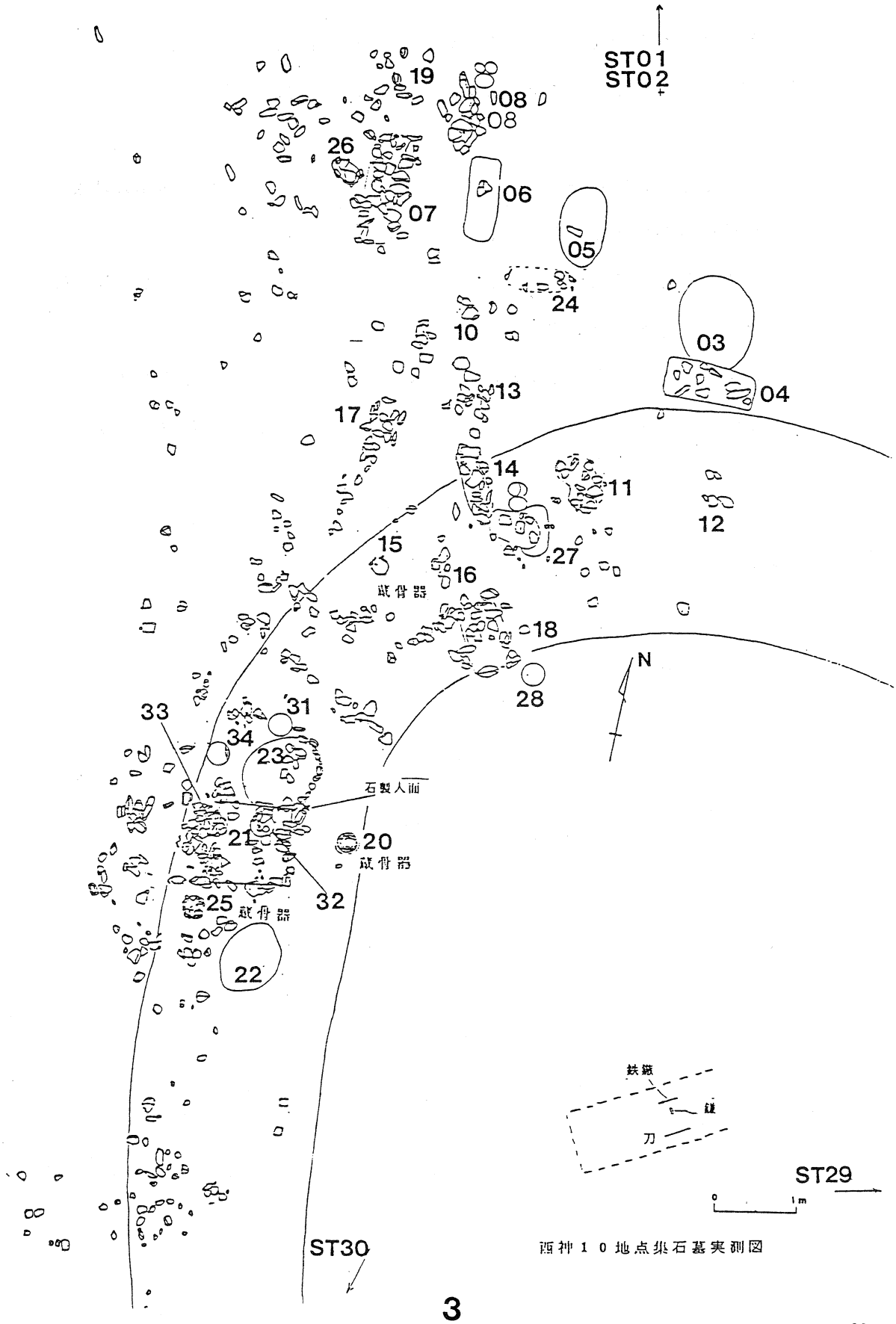
中世集石墓は、墳丘から流出し、堆積した土の上に築かれています。

墓は、合計３４基検出され、大きく４つのタイプに分けることができます。

１，蔵骨器　　ＳＴ15，20，25

２，その場で火をたいて葬ったもの　　ＳＴ03，05，06，16，22，23，29

2



西神１０地点集石墓実測図

3

3，石を組み合わせて骨を葬ったもの　　ＳＴ07,08,14,17,18,

4，ピット（小さな穴）に葬ったもの　　ＳＴ28,31,32,33,34

ＳＴ２０は、須恵器の甕に骨片を収めています。レントゲン撮影の結果、骨以外には銭などの副葬品はないようです。

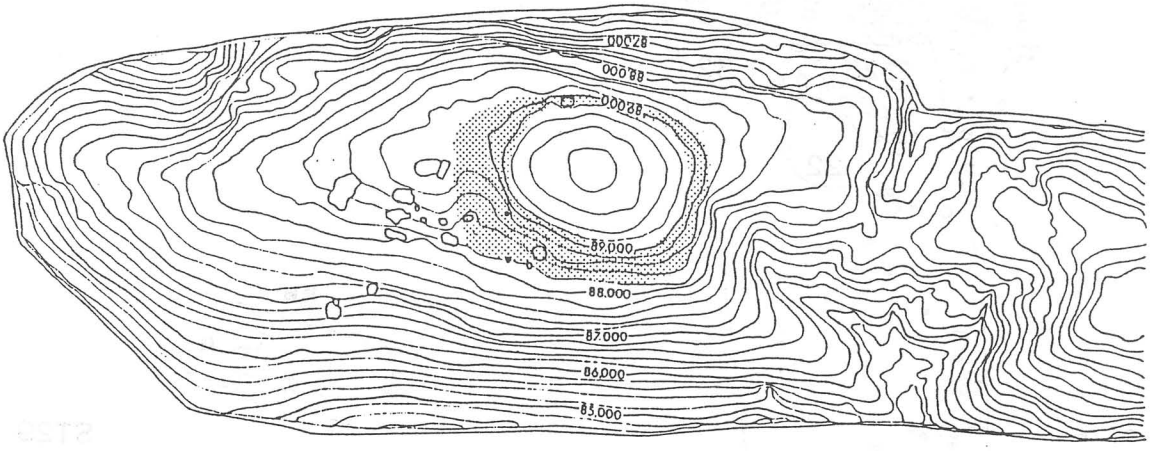
ＳＴ０３は、底面が非常によく焼けており、その場で火をたいて遺体を焼いたものと考えられます。

ＳＴ１４は、長方形の掘形の長辺短辺に石をたて、その中に骨を納め、さらに偏平な石を敷きならべています。骨や炭の他に中から白磁皿が一枚出土しました。

ＳＴ２８や３４は、直径約0.３ｍ程の穴をあけ、その中に骨片をおさめ墓標として石で蓋をしたり、石をたてたりしています。

その他に、ＳＴ２３のように礫を円弧状に組んでその中で火葬を行ったようなものもあります。

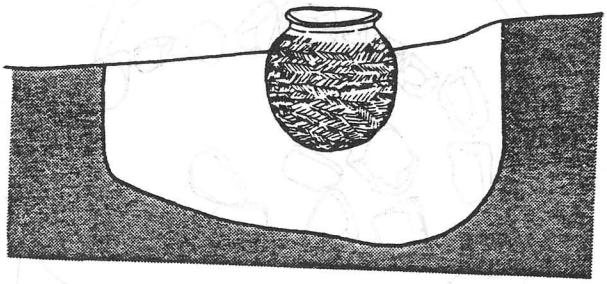
ＳＴ２３の南西隅から、石製人面が出土しています。石仏の顔面がはがれ落ちたものと思われますが、現時点では、この遺物の出土した意味はよくわかりません。今後検討すべき課題です。



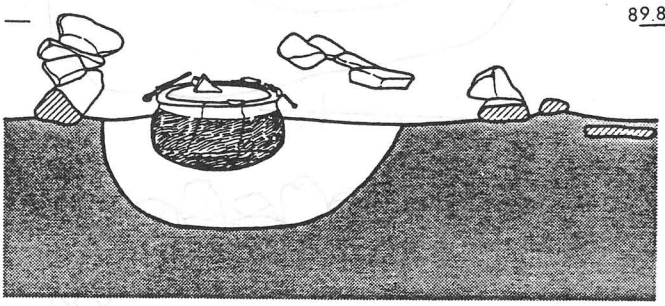
No.１０地点地形測量図

１／４００

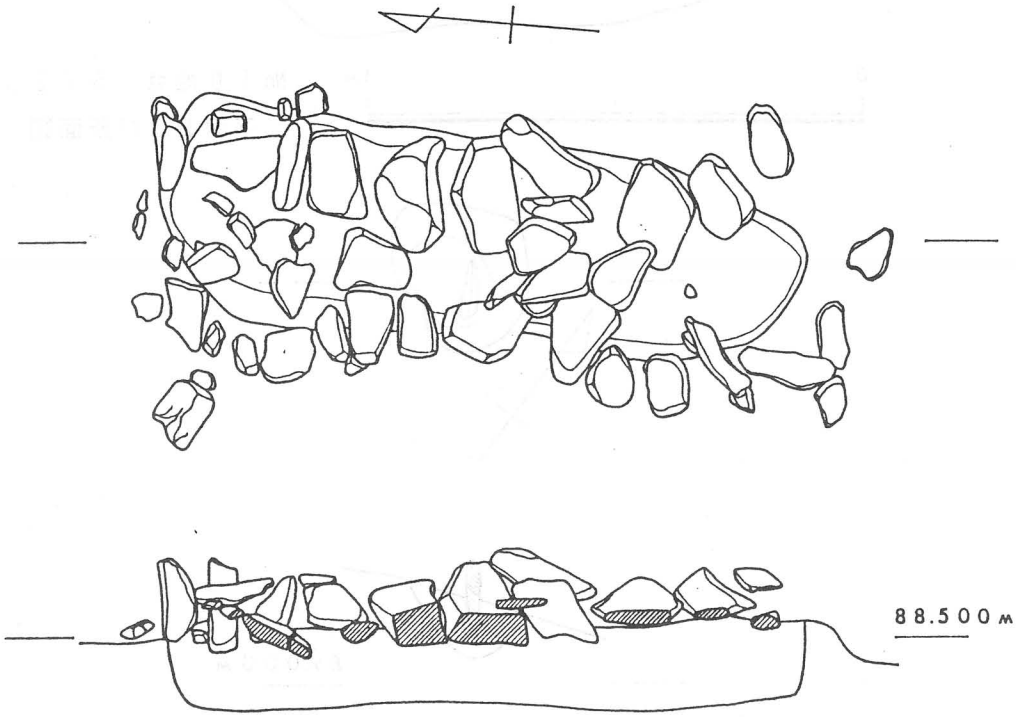
4



No.10地点　ST20
断面図

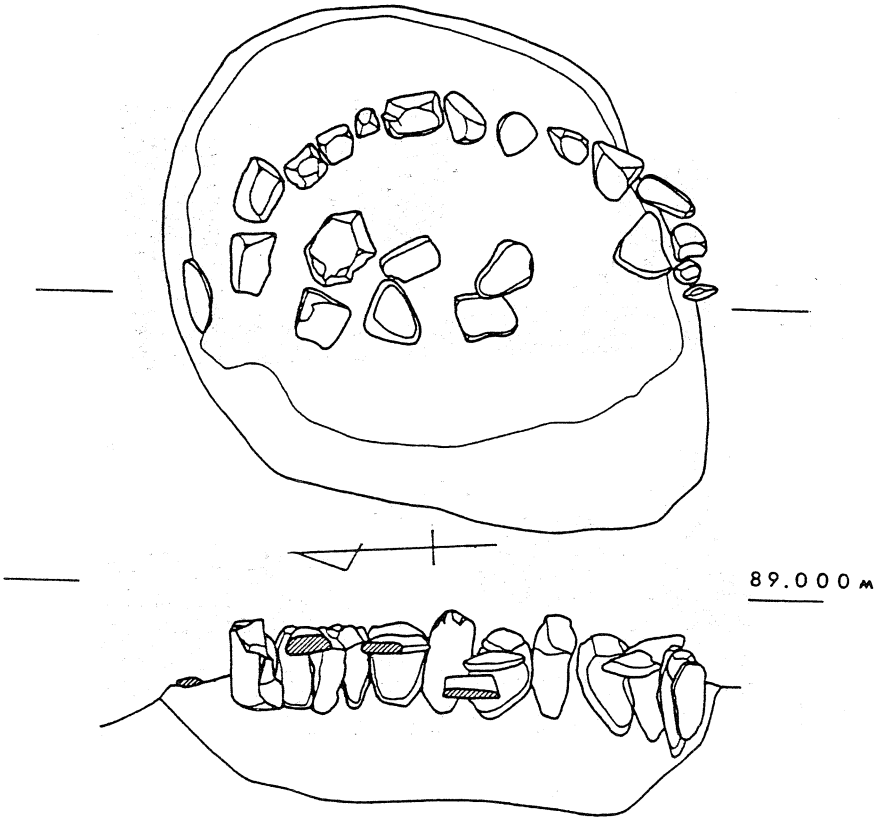


No.10地点　ST25
断面図

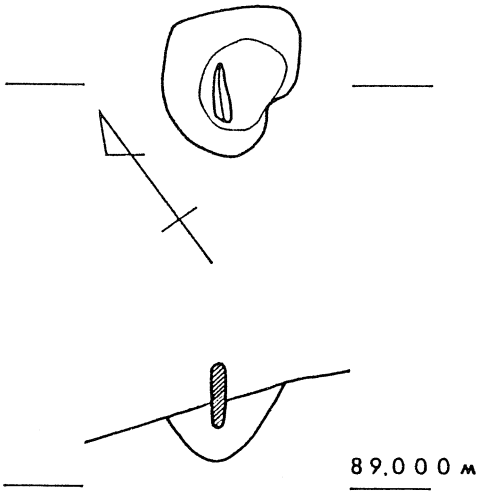


No.10地点　ST07
平面および断面図

5

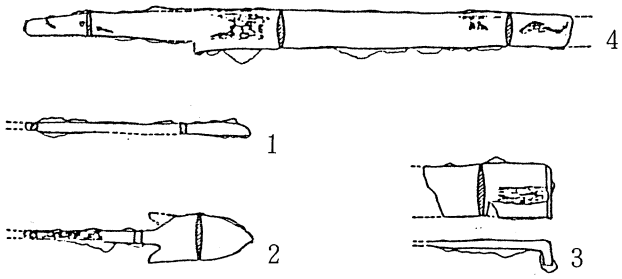


No.10地点　ST23
平面および断面図

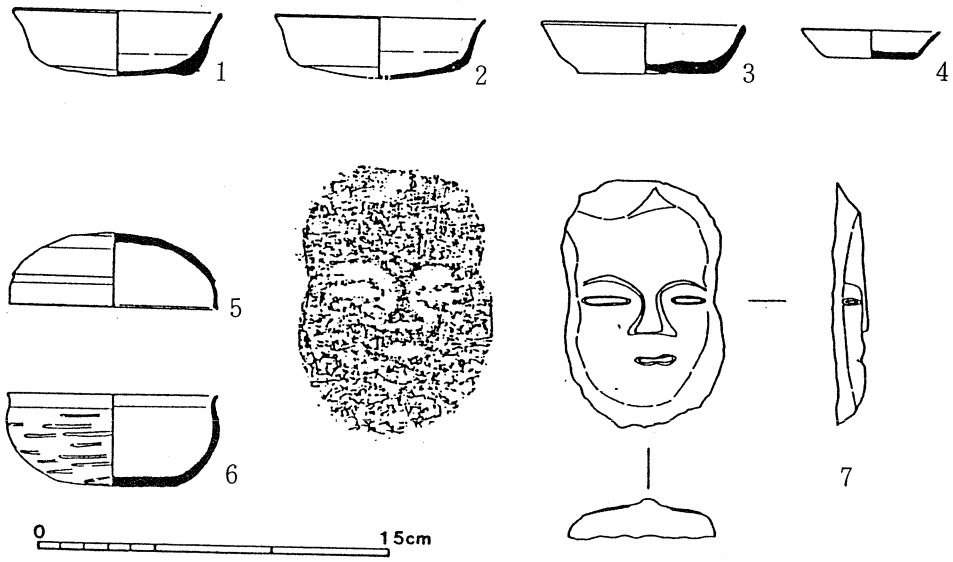


No.10地点　ST28
平面および断面図

6



No.10地点　古墳出土遺物
1，2　鉄鏃　3　鎌
4　刀子　S＝1／4



No.10地点　出土遺物　S＝1／4
1～3　土師器皿
4　ST14出土　白磁皿
5　古墳　周溝内出土須恵器
6　古墳　周溝内出土土師器
7　ST23　出土石製人面

No．11地点　　No．11地点からは、古墳1基と木棺墓及び土壙墓（どこうぼ）が7基検出されています。（別表参照）

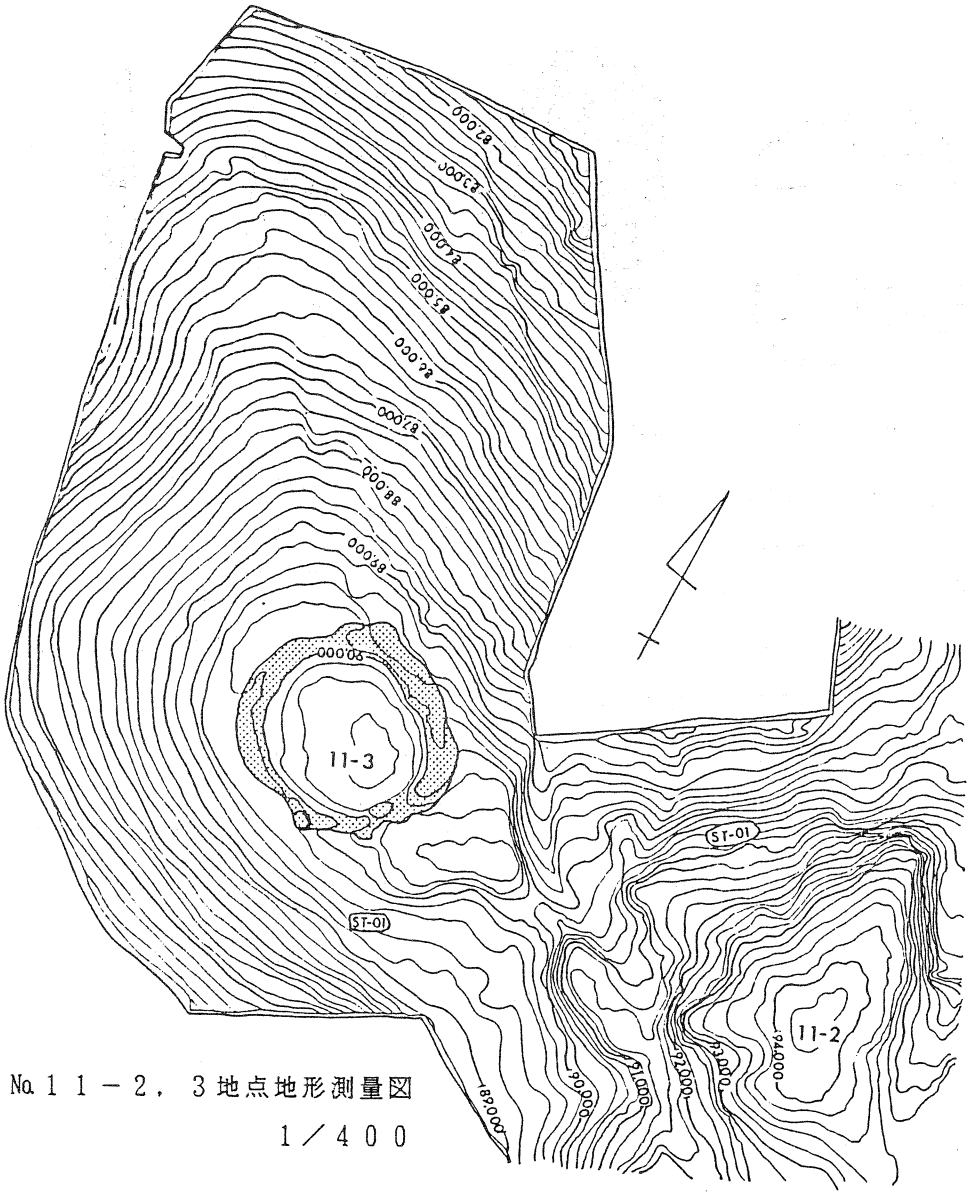
No．11地点の木棺墓・土壙墓群は、出土遺物から6世紀初め頃のものと考えられます。古墳時代後期の埋葬形態は、おおむね墳丘をもつものが多い中で、墳丘をもたずに木棺墓や土壙墓だけが検出されるという点で珍しい形態をもつものです。

No．11－3の古墳は、地山に溝をほりめぐらし、盛土をおこなって古墳を築いたものと考えられます。

発掘調査時には、墳丘自身は削平を受け、埋葬施設は認められませんでした。しかしながら周溝内の、溝底をさらに掘りこんで土器埋納坑（長さ 1.2

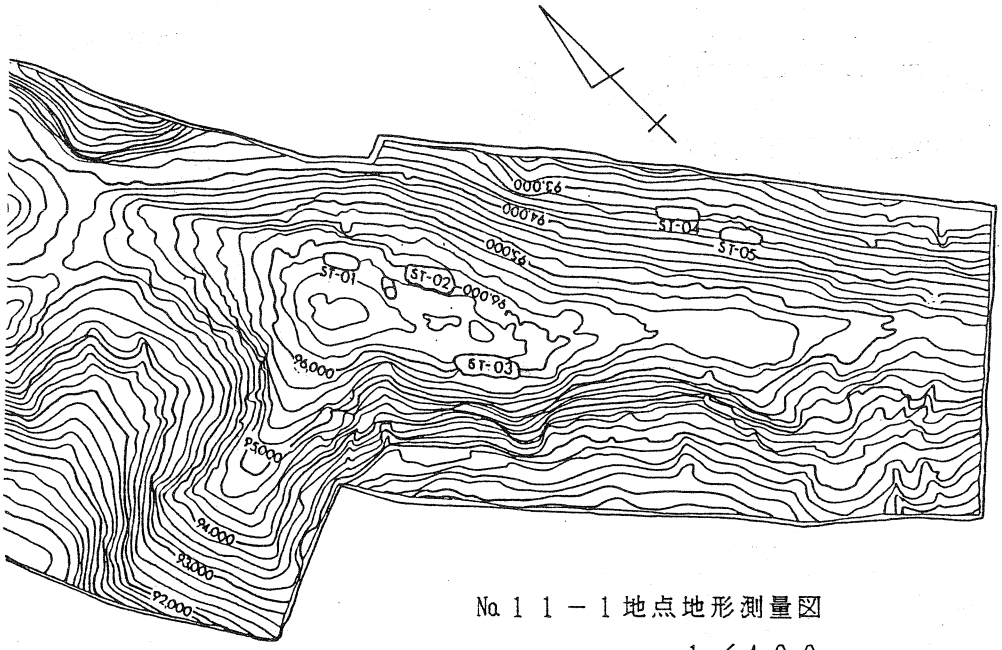
m，巾 0.6m，深さ 0.4m）が作られており、中に須恵器坏身、坏蓋がセットで納められていました。このように、周溝を掘りこんで土器埋納坑が作られている例は、玉津町の居住小山遺跡でも知られています。

古墳の墳丘部は、灰と焼土を用いて盛土されていますが、主体部はすでに削平されてしまったためか、地山面まで掘り下げても検出されませんでした。古墳の築造時期は、土器埋納坑内の土器からみて、5世紀末から6世紀初めごろと考えられます。



No.11－2，3地点地形測量図
1／400

8

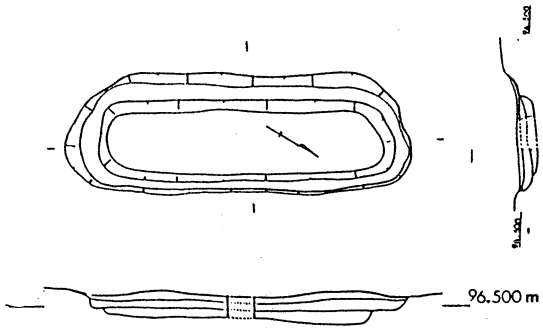


No. 11－1地点地形測量図

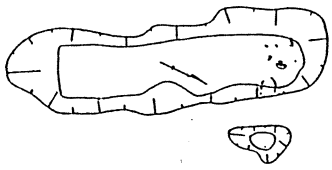
1／400

11地点　木棺墓　土壙墓　一覧表

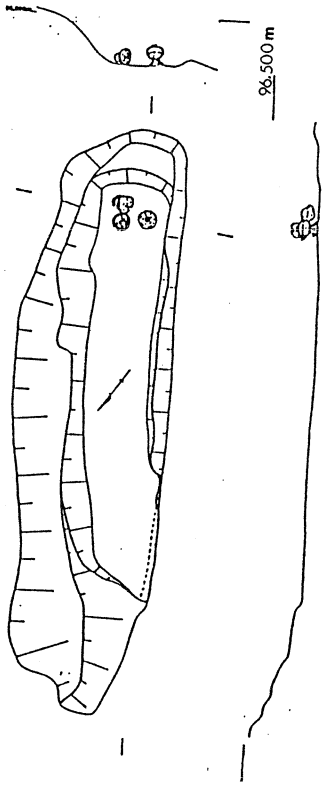
遺構名	掘方規模 m×m	棺規模 m×m	主軸	出土遺物
11－1 ST01（木棺墓）	1.95 ×0.7	1.65×0.45	北西	掘方上層より須恵器片
ST02（木棺墓）	2.5 ×0.7	1.95×0.7	北西	――
ST03（土壙墓）	2.5 ×0.6	――	北西	須恵器有蓋高杯 坩・坏身
ST04（木棺墓）	2.1 ×0.6	1.3 ×0.4	北西	――
ST05（土壙墓）	2.1 ×0.6	――	北西	管玉 9 ガラス玉 20
11－2 ST01（木棺墓）	2.8 ×1.2	2.0 ×0.45	西	――
11－3 ST01（木棺墓）	2.1 ×1.9	1.8 ×0.5	西	須恵器杯蓋



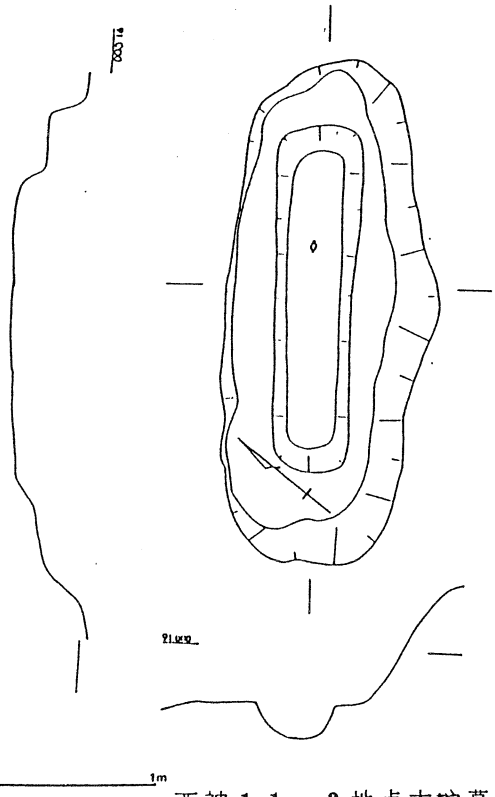
西神１１－１地点ST０１実測図



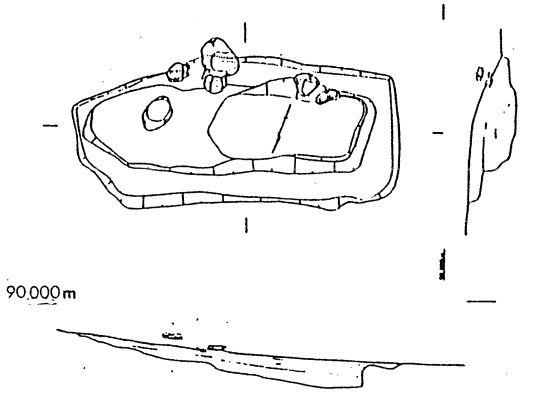
西神１１－１地点ST０５平面図



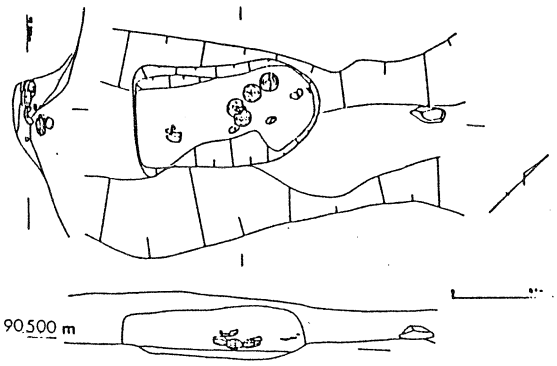
西神１１－１地点ST０３実測図



西神１１－２地点木棺墓実測図



西神１１－３木棺墓実測図



西神１１－３土器埋納坑実測図

10

Ｎｏ．１２地点　　Ｎｏ．１２－１地点は、すでに削平をこうむり，わずかにに高まりを残すのみですが、北側に弧状にめぐる溝と南側に散乱する土器の存在から、径約１０ｍ程度の円墳と考えられます。埋葬施設は失われていますが、南西側で古墳に関連すると思われる炭が入った土坑があります。古墳の築造年代は、出土遺物の時期から６世紀初頭と考えられます。

Ｎｏ．１２－２地点遺跡は、Ｎｏ．１２－１地点の北５０ｍに位置する標高約１０７ｍの平坦な尾根上に立地しています。すでに地山まで削平されていましたが、土器埋納坑（ＳＫ０１）とその北側に位置する土坑（ＳＫ０２が検出されました。

ＳＫ０１　　ＳＫ０１は、長さ 1.0ｍ，巾 0.9ｍ，深さ 6㎝の台形状の土坑で、土坑の西肩から須恵器坏身，有蓋高坏，土師器椀，紡錘車等が出土しました。

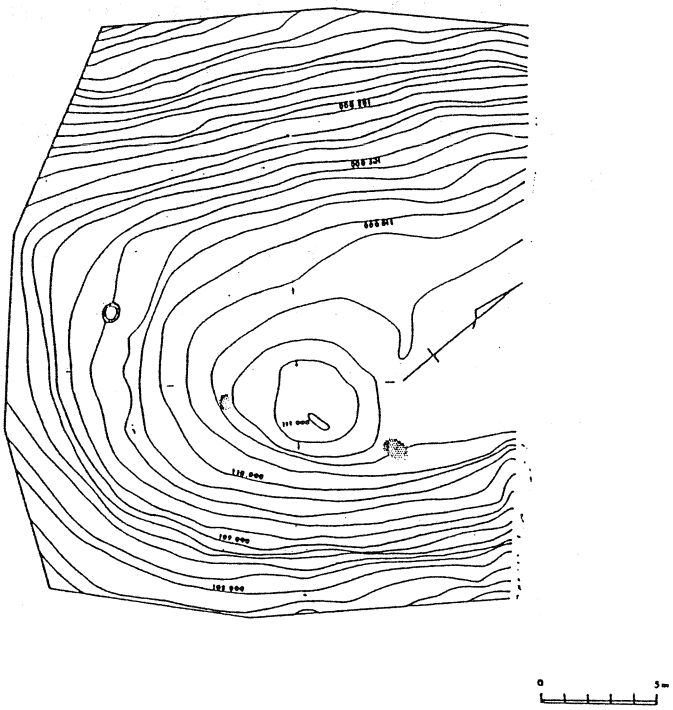
ＳＫ０２　　ＳＫ０２は、ＳＫ０１の北側に位置する南北４ｍ，東西 1.2ｍ，深さ 0.2ｍの長方形の土坑です。攪乱土の中から須恵器高坏や鉄片が出土しています

これらの年代は、出土須恵器の形式から６世紀初頭と考えられます。すでに、この地点が地山まで削平されているため、果たして墳丘があったかどうかは疑問ですが、古墳時代の埋葬施設が存在した可能性は極めて高いと思われます。

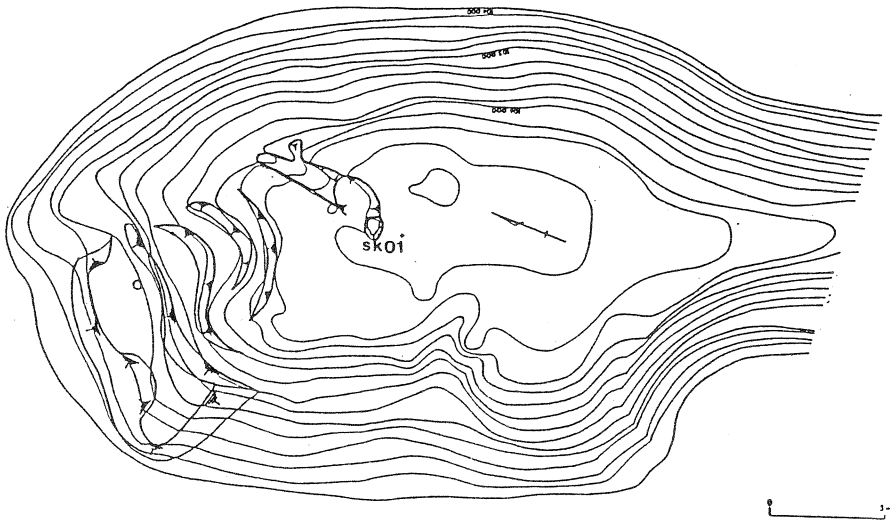
Ｎｏ．１２－３地点では、古墳１基とその南側で「コ」の字形に巡る溝１条，半円形に巡る溝１条が検出されました。「コ」の字形の溝は、１辺約５ｍ，巾 0.8ｍ，深さ 0.3ｍ、半円形の溝は径約５ｍ，巾 0.8ｍ，深さ 0.4ｍです。

遺物が出土しなかったため、この２条の溝の時期を断定はできませんが、古墳との切り合い関係や埋土からみて古墳と同時期もしくはそれ以前と考えられます。

古墳は、径約１０ｍ，残存高約 1.2ｍの円墳で、南側に巾 1.1ｍ，深さ 0.3ｍの周溝が尾根を切断するように巡っています。北側墳丘裾から、散乱し



西神１２－１地点測量図

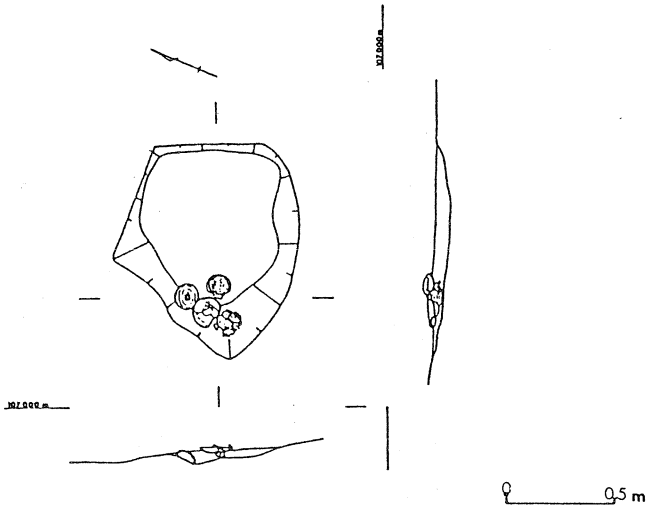


西神１２－２地点測量図

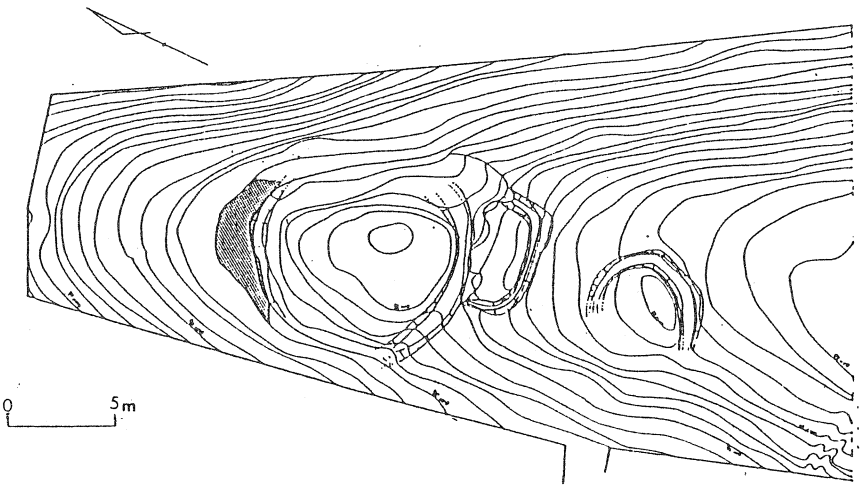
た状態で須恵器が出土しています。

Ｎｏ．１２－３地点は、木棺を埋葬施設とする直径約１０ｍの円墳と考えられますが、調査の結果、埋葬施設は検出されませんでした。古墳の築造時期は、出土した須恵器の型式から６世紀初頭と考えられます。

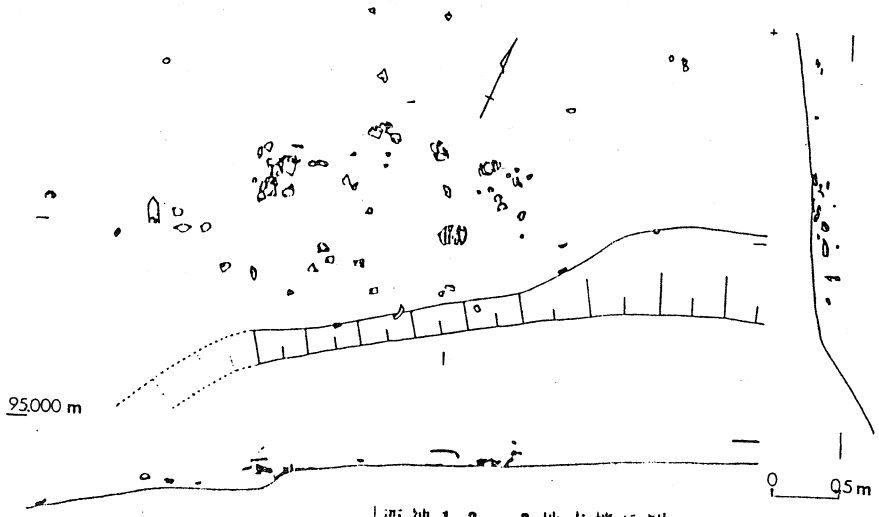
まとめ　Ｎｏ．１０地点で検出された中世集石墓群は、３４基あり、神戸市内では同時期のものとしては最大の規模をもつものです。中世の墓制を考えるうえで重要な資料を呈示しているものと思われます。



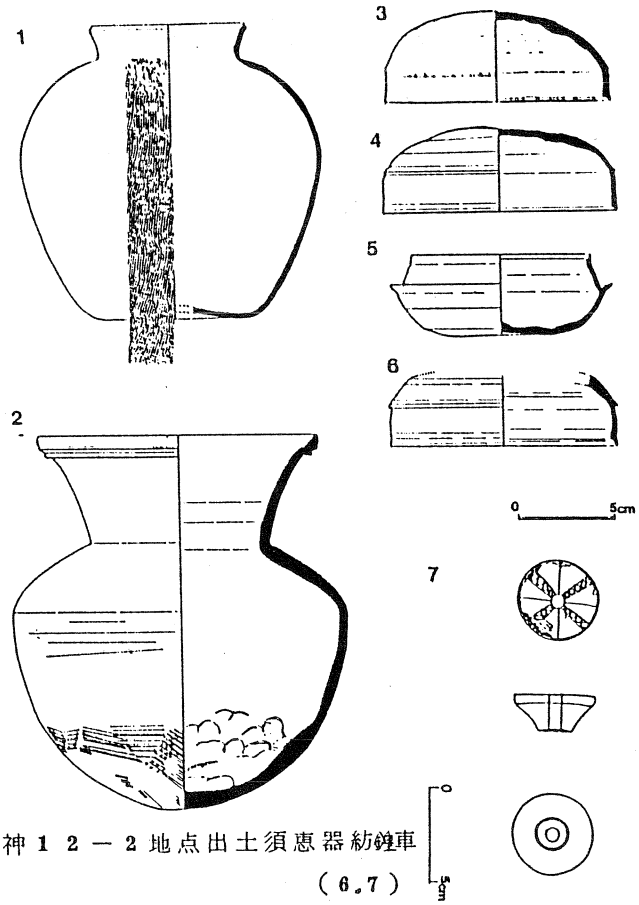
西神１２－２地点土器埋納坑
SK０１実測図



西神１２－３地点測量図

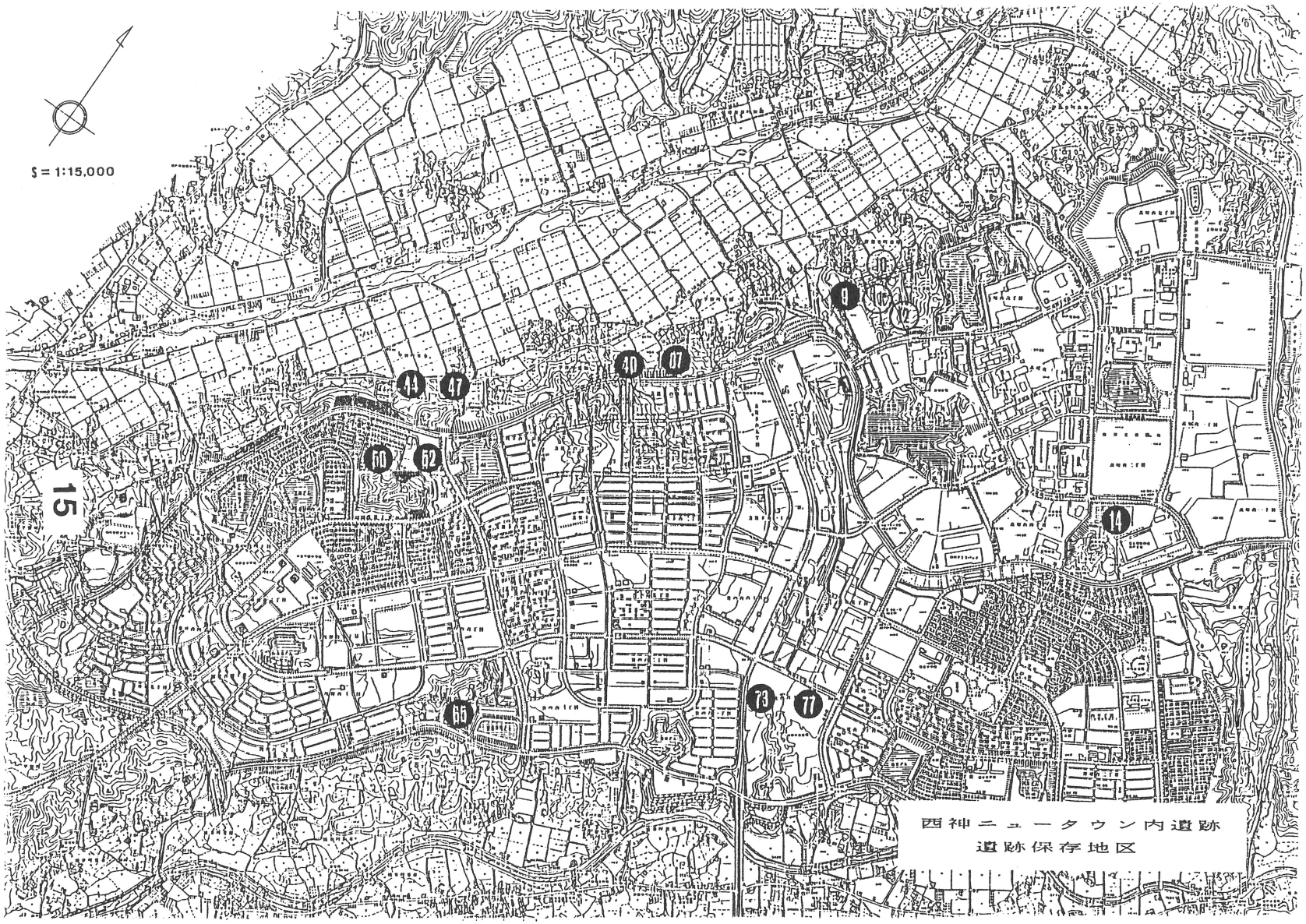


西神１２－３地点墳丘遺
須恵器出土状態実測図



西神１２－２地点出土須恵器紡錘車
（６，７）

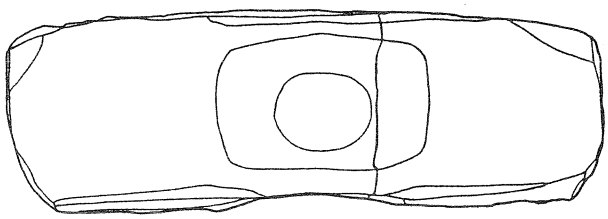
西神１２－３地点出土須恵器
（１～５）


S = 1:15,000
15
44
47
40
07
60
62
65
73
77
9
14
西神ニュータウン内遺跡
遺跡保存地区

天王山古墳群

5・6号墳

現地説明会資料



昭和６３年１月１５日

神戸市教育委員会

今回の調査については、神戸市文化財専門委員　小林行雄・檀上重光
宮本長二郎の三先生に御指導頂きました。
また、三和ホーム株式会社の御協力を得ました。

表紙：天王山5号墳東棺出土石枕

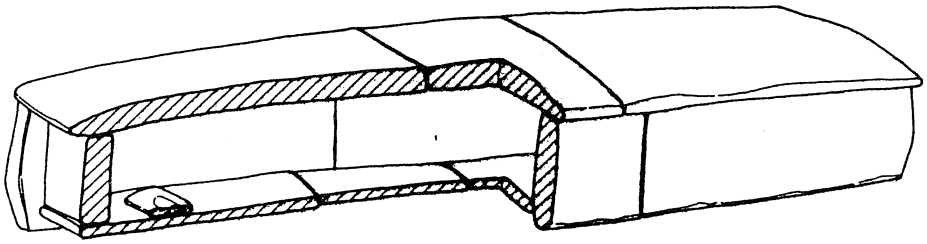
1　はじめに

天王山古墳群は、昭和４５年の分布調査によって、１８基の古墳の存在を推定していました。昭和４７年の試掘調査によって、そのうち４基の古墳の規模などがわかりました。

昭和５５年に天王山１,１－２,２，３,４号墳を含む開発計画に伴い４号墳を全面調査しました。その後４号墳は消滅しましたが、開発者の協力によって、１～３号墳の４基の古墳は、公園として整備され、保存されています。

昭和６１年に、５号墳が攪乱を受けたため、応急処置として中央棺を中心とした調査をおこないました。さらに今回は、昨年９月から開発計画に伴い全面調査をおこないました。そして新たに６号墳を発見しました。

調査終了後は宅地開発が予定されており、５・６号墳の保存方法について現在検討中です。



５号墳石棺復元想定図

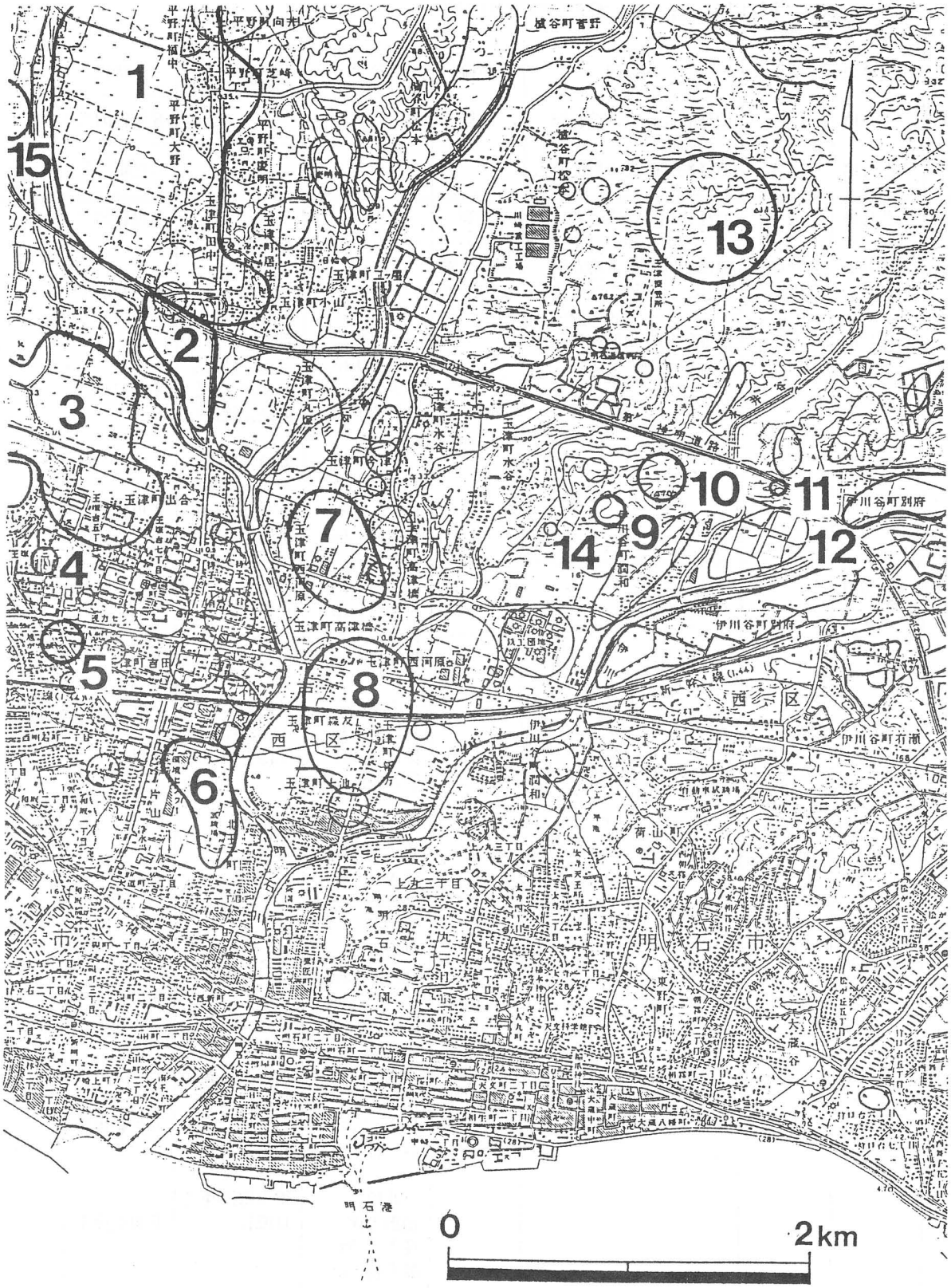
2. 周辺の遺跡

六甲山系に源を発し、丘陵部を抜けた伊川は明石川に合流し、その流域に平野を形成しています。これら河川の流域では、古くから人々の生活がいとなまれ、その痕跡が遺跡として現在にまで残されています。

天王山古墳群周辺の遺跡としては、櫨谷(はせたに)町青谷遺跡で先土器時代の遺物が出土しています。これを最古の例として数多くの遺跡がこれまでに確認されています。なかでも弥生時代の吉田遺跡、玉津田中遺跡、新方(しんぼう)遺跡、古墳時代の瓢塚(ひさごづか)古墳、王塚古墳、奈良時代の明石郡衙(ぐんが)ではないかと考えられている吉田南遺跡などがよく知られています。

	国内の主な遺跡	神戸市内の主な遺跡
先土器時代	岩宿遺跡（群馬県）	青谷遺跡（西区）…… 13
-10000 B.C.		
縄文時代	土器作りが始まる 夏島貝塚（神奈川県） 加曽利貝塚（千葉県） 亀ケ岡遺跡（青森県）	大歳山遺跡（垂水区） 雲井遺跡（中央区） 元住吉山遺跡（西区） 宇治川南遺跡（中央区）
-300 B.C.		
弥生時代	稲作が伝わる 菜畑遺跡（佐賀県） 板付遺跡（福岡県） 唐古遺跡（奈良県） 池上遺跡（大阪府） 登呂遺跡（静岡県）	吉田遺跡（西区）…… 5 戎町遺跡（須磨区） 居住遺跡（西区）…… 2 玉津田中遺跡（西区）…… 1 新方遺跡（西区）…… 8 今津遺跡（西区）…… 7 青谷遺跡（西区）…… 13 池上北遺跡（西区）…… 12 池上口ノ池遺跡（西区）
-300 A.D.		
古墳時代	古墳がつくられる 箸仲山古墳（奈良県） 誉田山〔応神陵〕古墳 大仙〔仁徳陵〕古墳 （大阪府） 見瀬丸山古墳（奈良県）	吉田南遺跡（西区）…… 6 出合遺跡（西区）…… 3 天王山4号墳（西区）…… 10 天王山墳5号墳 …… 10 瓢塚古墳（西区）…… 9 五色塚古墳（垂水区） 王塚古墳（西区）…… 4 鬼神山古墳（西区）…… 11 中村古墳群（西区）…… 15 天王山 1～3 号墳 …… 10 延命寺古墳（西区）…… 14 天王山6 号墳（西区）…… 10
-600 A.D.		
飛鳥・奈良時代	飛鳥や奈良に都がおかれる 高松塚古墳（奈良県） 平城京跡（奈良県）	吉田南遺跡（西区）…… 6

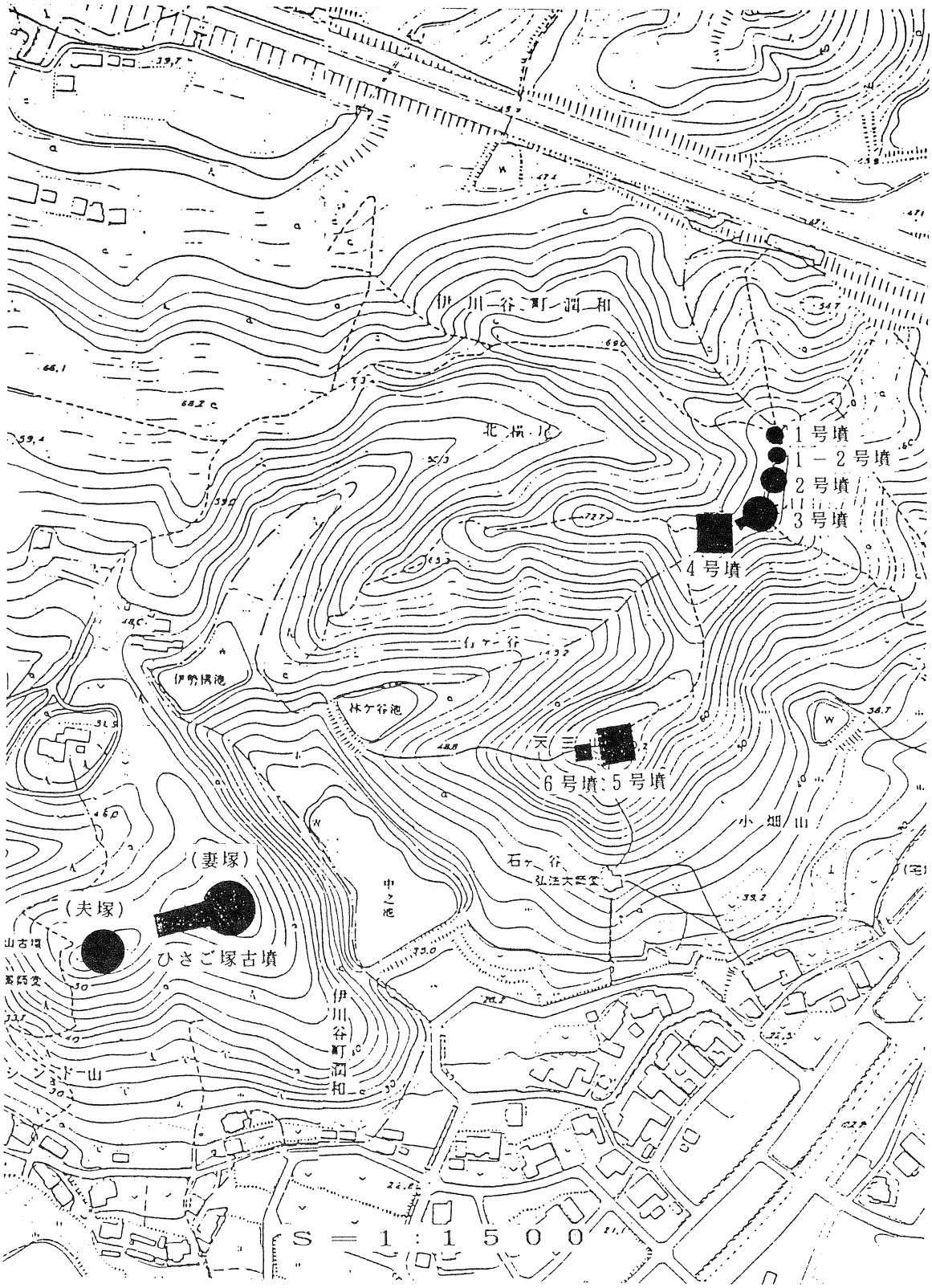
〔注：　この表の遺跡番号は、地図の番号と対応しています。〕



3

3．天王山古墳群の内容

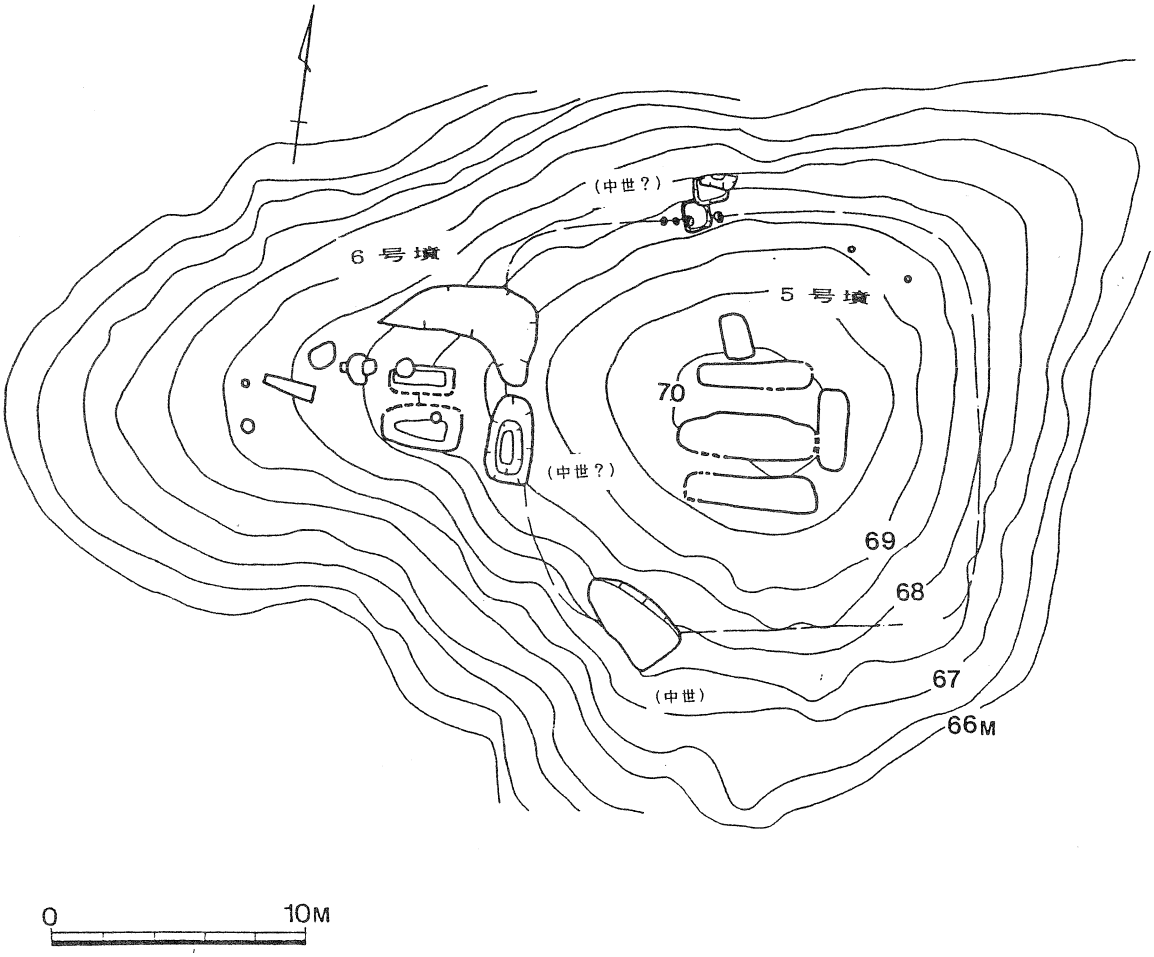
古墳名	墳形	規模	埴輪	埋葬施設	副葬品	時代
1号墳	円	直径約10m，高さ約1.2m	円筒	――	――	6世紀前半
1-2 号墳	円	直径約10m，高さ約0.6m	――	――	――	6世紀　？
2号墳	円	直径約14.5m，高さ約1.3m	円筒	――	――	6世紀前半
3号墳	帆立貝式 2段築成	直径約20m，高さ約2.5m， 幅10m，長さ5mの造り出し	円筒，盾 馬，人物	――	――	6世紀前半
4号墳	方	南北約19m，東西約16m， 高さ約3.3m	――	（1号棺） 割竹形木棺 長さ 4.5m 最大幅0.6m	管玉2，ガラス玉5，鉄刀2， ヤリガンナ1， 鋤先1，鉄斧1，	4世紀
				（2号棺） 割竹形木棺 長さ 5.4m 最大幅0.5m	銅鏡1，管玉5， ガラス玉16， ヤリガンナ1 鋤先1，	4世紀
5号墳	方	1辺約20m 高さ約2.0m	――	（東棺） 組合式石棺 長さ 2.6m 最大幅0.6m	？	？
				（中央棺） 割竹形木棺 長さ 5.2m 最大幅0.6m	鉄剣1， 土師器片1， 他は不明	4世紀
				（北棺） 割竹形木棺 ？ 長さ 4.2m? 最大幅0.5m	針状鉄器1，	4世紀
				（南棺） 割竹形木棺 長さ 4.2m? 最大幅0.5m	――	4世紀
6号墳	方	1辺約8m 高さは墳丘流失のため 不明	――	（南棺） 箱形木棺 長さ 2.3m 最大幅0.6m	須恵器杯蓋2， 鉄鏃13本， 刀子1， 鹿角装刀子1，	6世紀後半
				（北棺） 箱形木棺 長さ 1.8m 最大幅0.6m	須恵器杯身 1 耳環1，	6世紀後半


伊川谷町潤和
北横尾
1号墳
1－2号墳
2号墳
3号墳
4号墳
伊勢講池
林ケ谷池
6号墳・5号墳
小畑山
石ケ谷
弘法大師堂
中之池
（妻塚）
（夫塚）
ひさご塚古墳
伊川谷町潤和
S＝1：1500

5

4．調査の成果

今回は、先の5号墳の調査を継続して行いました。また、その周辺部についても調査を行い、これまで知られていなかった6号墳を新たに発見することができました。そのほか、中世の遺構なども検出しています。



遺構図

5号墳

墳　　丘　尾根の地形を利用し、これを削り出して古墳として形を整えたもので、盛り土はありませんでした。一部で墳丘を区画するためのテラス状の平坦面が残っているものの、墳丘がかなり流出しています。そのため、正確な規模はわかりませんが、1辺約20mの方墳であったと考えられます。

葺石や埴輪はありませんでしたが、墳丘北側斜面から土師器の壺の破片が出土しています。

埋葬施設（まいそうしせつ）　4基の埋葬施設があります。

東西方向に主軸をもち、長大な木棺を納めた埋葬施設が3基（中央棺、南棺、北棺）あり、その東に南北方向に主軸をもつ組合式石棺（東棺）があります。

〔中央棺〕　東西5.9m、南北2.0m、深さ1.0mの墓壙に長さ5.2m、幅0.6mの割竹形木棺（わりたけがたもっかん）を納めたものです。

この墓壙の埋め土は非常に堅かったため、木棺が腐朽した後も棺上部の土が一部をのぞいてくずれ落ちませんでした。そのため棺自体は残っていませんでしたが、埋め土の形状から棺の断面が円形であったことがわかりました。

棺の中央部がこわされていますが、それ以外のところから鉄剣と土師器片が出土しました。棺底には、赤色顔料が残っています。

〔南棺〕　東西5.7m、南北1.3m、深さ0.5mの墓壙に長さ4.2m？、幅0.5m

の割竹形木棺を納めたものです。

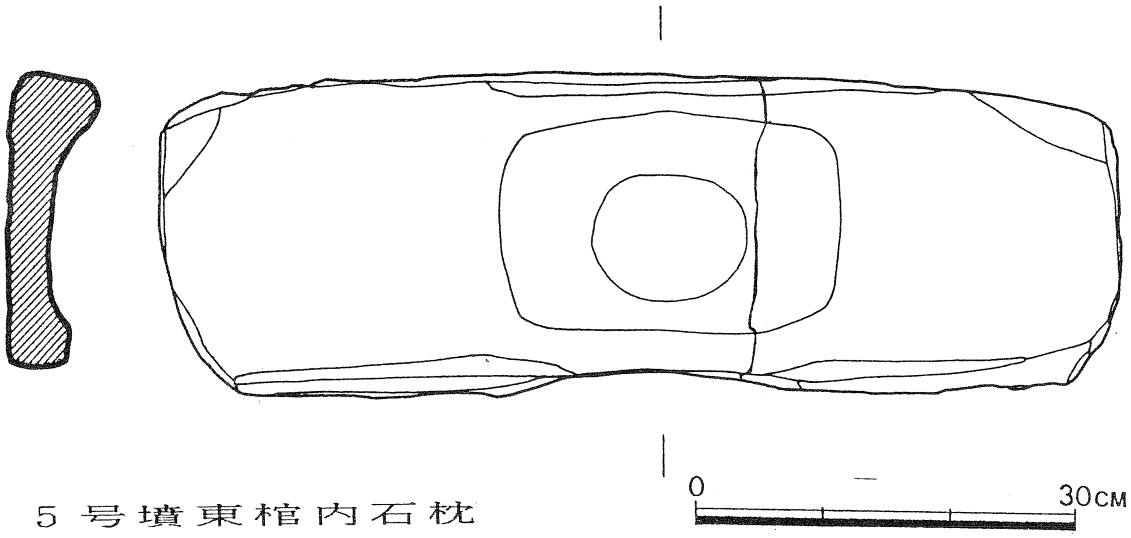
遺物は出土せず、赤色顔料が一部でかすかに残っています。

〔北棺〕　東西5.0m、南北1.1m、深さ0.4mの墓壙に長さ4.2m？、幅0.5mの割竹形木棺あるいは箱形木棺を納めたものです。

赤色顔料を肉眼でみつけることは出来ませんでした。棺底から針状鉄器が1点出土しています。

〔東棺〕　攪乱により石棺は完全にこわされていました。しかし、石棺を埋めた墓壙に残された痕跡から、石棺が置かれていた状態を推定することができます。

長さ3.4m，幅1.3m，深さ0.7mの墓壙に、内寸全長2.3m，幅0.45m の組合式石棺が納められていました。蓋石と側石の一辺がそれぞれ3石、小口石が各1石、底石が4石、合計15個の板状に加工した凝灰質砂岩（ぎょうかいしつさがん）を組み合せるもので、石棺と同じ石材でつくられた枕がおかれています。石枕の全面と棺の内面に赤色顔料が塗られています。



5号墳東棺内石枕

8

北棺

中央棺

東棺

南棺

5号墳埋葬施設

0 3m

5号墳出土遺物 1，針状鉄器　（北棺）

2，土師器？（墳丘北側斜面）

9

6号墳

墳　　丘　　墳丘のほとんどが流出し、盛り土はわずかに残っているだけでした。しかし、墳丘の北東部に周溝が残っており、その形状から6号墳が小規模な方墳であることがわかりました。葺石(ふきいし)や埴輪(はにわ)はありません。

埋葬施設　　東枕の埋葬施設2基を検出しました。

〔南棺〕　　東西3.5m、南北1.8mの墓壙に長さ2.3m、幅0.6mの箱形の木棺を納めたものです。棺の東で須恵器の坏蓋2個体が重ねられた状態で出土しています。これは枕として用いられていたようです。市内での類例は垂水区舞子古墳群にみることができます。

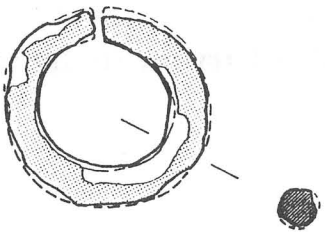
副葬品は遺骸の右側にそえられていました。頭部付近に刀子、胴部から足元にかけて鉄鏃2束、鹿角装刀子(ろっかくそうとうす)が置いてあります。

〔北棺〕　　東西3.5m、南北1.2mの墓壙に長さ1.8m、幅0.6mの箱形の木棺を納めたもので、木棺の小口部分を粘土でおさえています。

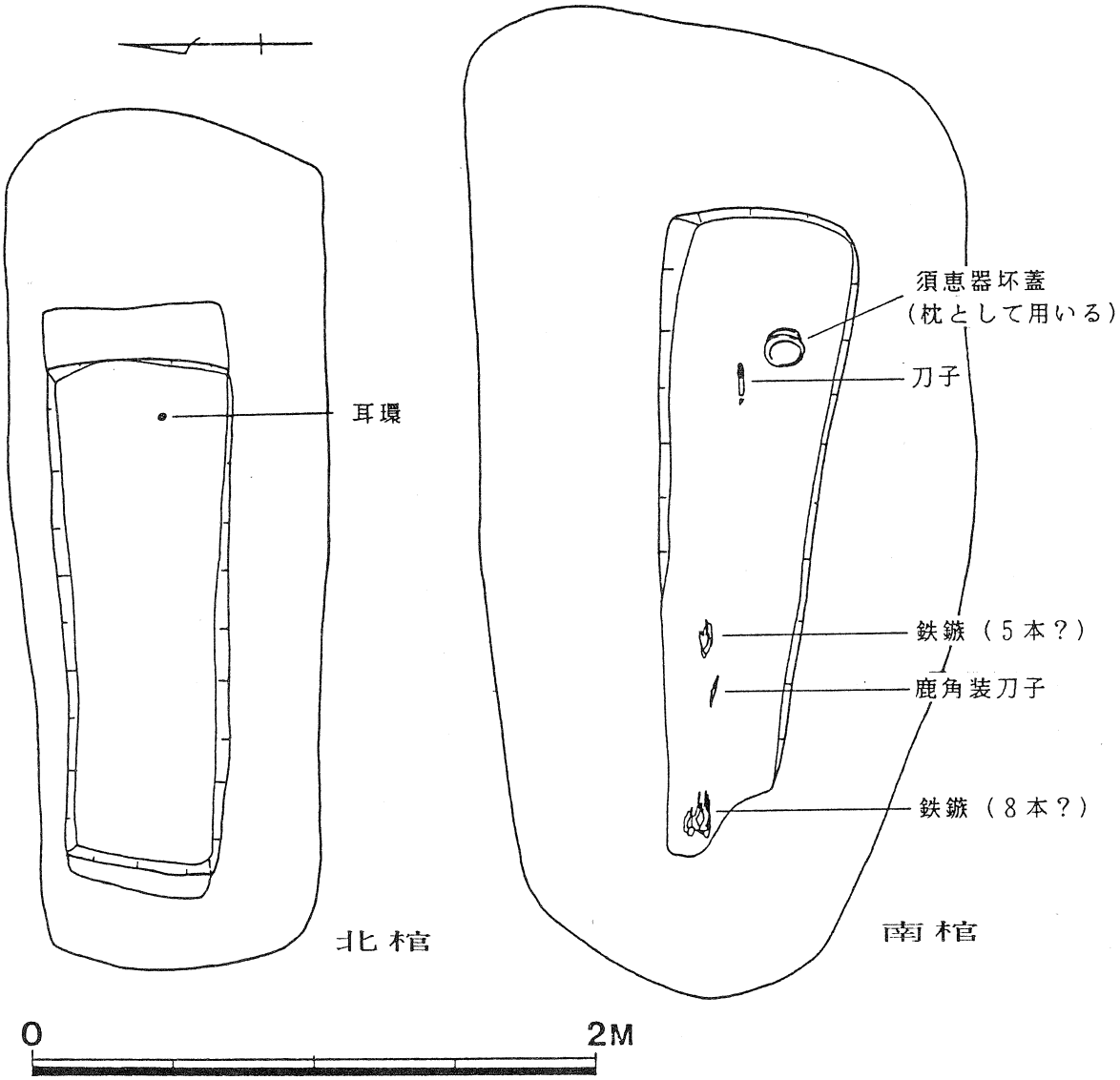
棺底の東寄りで耳環1点が出土しています。その他の副葬品はありませんでしたが、木棺の腐朽により落ち込んだ土の中から、木棺の上に置かれたと考えられる須恵器坏蓋が1個体出土ししています。なお、耳環(みみわ)1点が周溝底からも出土しています。

6号墳周溝出土　耳環

S＝1：1

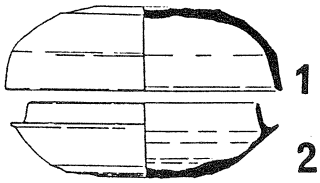


10

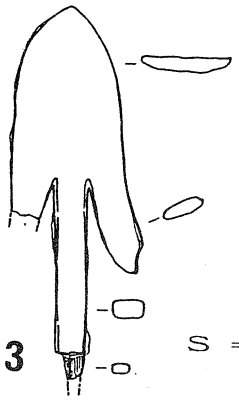


6号墳埋葬施設

11



S＝1：4



S＝1：2

6号墳南棺出土遺物

1，須恵器坏蓋（墓壙内）
2，須恵器坏身（墓壙内）
3，鉄鏃（棺内）

5．まとめ

5号墳では、長大な木棺をもつ埋葬施設3基と石棺をもつ埋葬施設1基が検出されました。3基の木棺はほぼ平行してすえられ、墓壙の東端も位置がそろっています。このような配置から、この3基はほぼ同時にいとなまれたものと考えられます。このなかで中央棺は長さ5.2mをはかり、割竹形木棺直葬としては、兵庫県下で最大級のものです。また、この3基の後にいとなまれた東埋葬施設の石棺も長さ2.6mをはかり、組合式石棺としては県下最大級です。

出土した副葬品が少なかったため、その組み合せから5号墳の築造年代をもとめることは困難です。しかし、埋葬施設の様相からは、この古墳が古墳時代前期のものであることがわかります。

6号墳は、2基の埋葬施設からそれぞれ須恵器が出土しており、ともに6世紀後半に築かれたことがわかります。

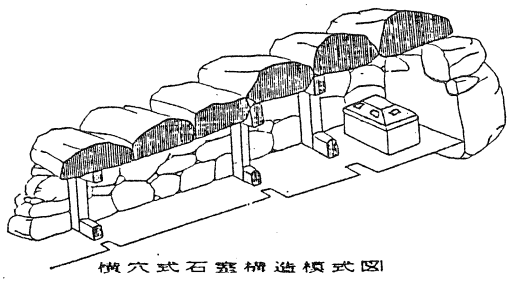
1 古墳の埋葬施設

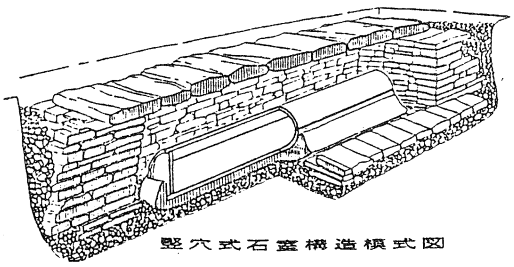
古墳に遺体を埋葬する場所を「内部主体」とか「埋葬施設」とよんでいます。その仕組みは大きく3種類にわかれます。1つは、遺体を入れる「棺」、その棺を覆う「槨」、あるいは棺を納める空間のある「室」というようにわかれます。この「棺」、「槨」、「室」にもいろいろな形があり、地域や時期によってことなっています。

棺、槨は、その材質により木棺，石棺，粘土槨などがあります。さらに木棺や石棺は、その形によっていくつかに別けることができます。例えば、直径が80cmもあるような丸太を、竹を割るようにたてに割ってから、その中をくりぬいて棺にする割竹形木棺。あるいは、板材を組み合わせて作った箱形木棺などがあります。

棺を槨や室に入れずに、直接、墓壙（墓穴）に埋める方法を木（石）棺直葬と呼んでいます。

石室には、棺を上から入れて蓋をし、完全に密閉してしまう竪穴式石室と、石室の入口の開閉が可能な横穴式石室があります。

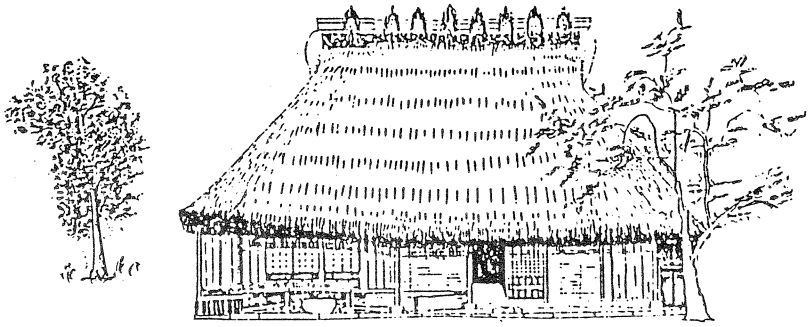

横穴式石室構造模式図


竪穴式石室構造模式図

古墳辞典（東京堂出版）より

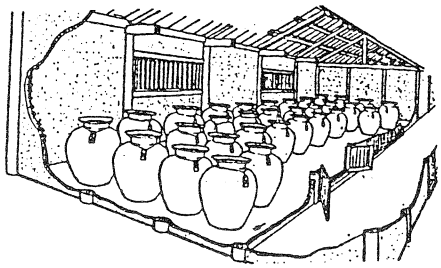
上小名田遺跡

現地説明会資料



昭和６３年１月２４日

神戸市スポーツ教育公社
神戸市教育委員会



大甕を据えた穴の復元模式図
（図は長岡京の出土例・
月刊文化財発掘出土情報　86.5より）
Ｖ区ＳＢ０１で検出された穴も、図
のようであったと推定されます。

今回の調査については、神戸市文化財専門委員　檀上重光・宮本長二郎の両先生に御指導頂きました。
また、神戸市道路公社の御協力を得ました。

1．はじめに

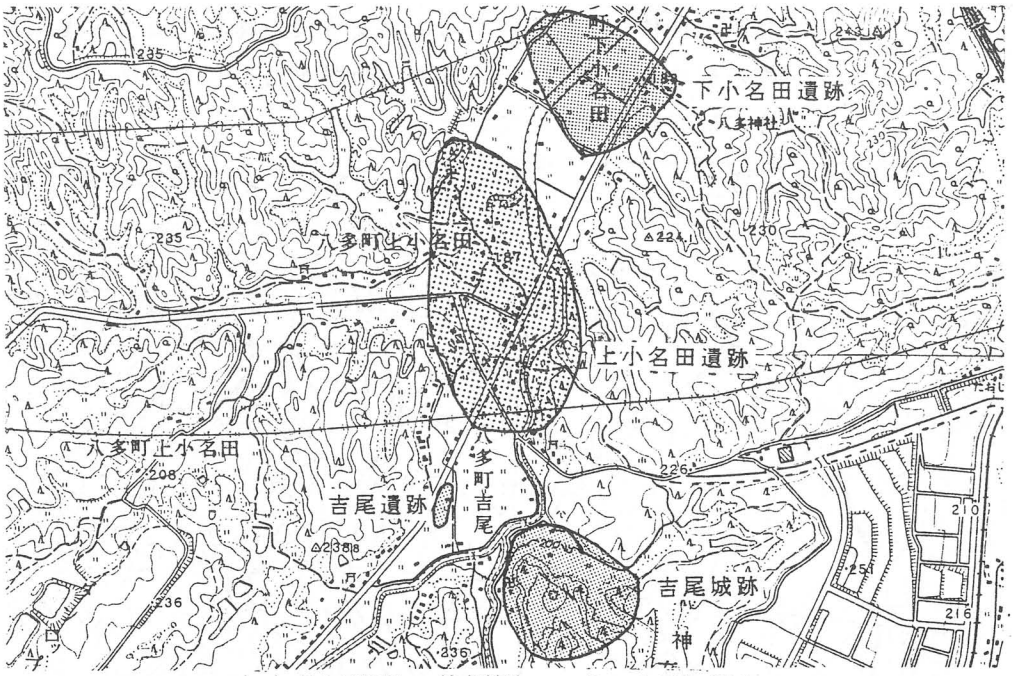
上小名田遺跡は、六甲北有料道路築造工事に伴う遺跡確認調査（試掘調査）によって発見されました。

遺跡は、八多川の西岸、標高190m前後に立地しています。

周辺の遺跡　これまで、この周辺では中世山城とされる吉尾城址、および六甲北有料道路とその関連工事に伴い調査された吉尾焼の窯跡（江戸時代末～明治時代初め）と、掘立柱建物・井戸などが検出された吉尾遺跡（平安時代末）が知られているだけです。また今年度、当遺跡の北方約1kmの八多町下小名田で、試掘調査により下小名田遺跡が発見されました。この遺跡からは、古墳時代・平安時代から中世にかけての遺物が出土しています。

調査の経過　今回の道路予定地延長600mの範囲で遺跡が確認されたため、今年度は調査予定範囲内の5地区計約3,400㎡について発掘調査を行っています。

調査の結果、平安時代から鎌倉時代にかけての掘立柱建物9棟・溝12条・土坑22基・自然流路などが見つかりました。



上小名田遺跡　位置図　　S＝1/25,000

2．調査の概要

＊Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区　　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区の調査では自然流路を確認しました。

自然流路　　この流路は、上部で幅約１１ｍ、深さ1.５ｍの規模を測るものです。おおむね、この流路は２回の洪水の後埋まったものと思われます。土層の観察により、初期の頃には強い流れであったものが、２回目の大きな洪水の後は流れが弱まり、流路が徐々に埋まっていった様子が確認できました。

流路の中からは、太さ0.４ｍ、長さ８ｍ以上の大きな流木や、木の実、枝葉などが出土しています。それらに混じって平安時代のものと思われる下駄も出土しています。

木の実や枝葉を詳しく調べることによって、これらの洪水の起こった季節が、秋であったことがほぼ特定できました。（市立森林植物園　三宅　慎也氏の御教示による。）

また、Ⅱ区・Ⅲ区およびⅠ区の調査結果からみると、この流路は大きく蛇行して流れていたようです。

この流路のできた時期については確実な資料がなく、今後の調査を待たねばなりません。ただ、流路が埋まってしまった後に堆積した土の中から、平安時代の終わり頃から鎌倉時代の初めにかけての須恵器や土師器が出土しており、それ以前には流路が存在していたようです。

調査地位置図　　Ｓ＝1/5,000

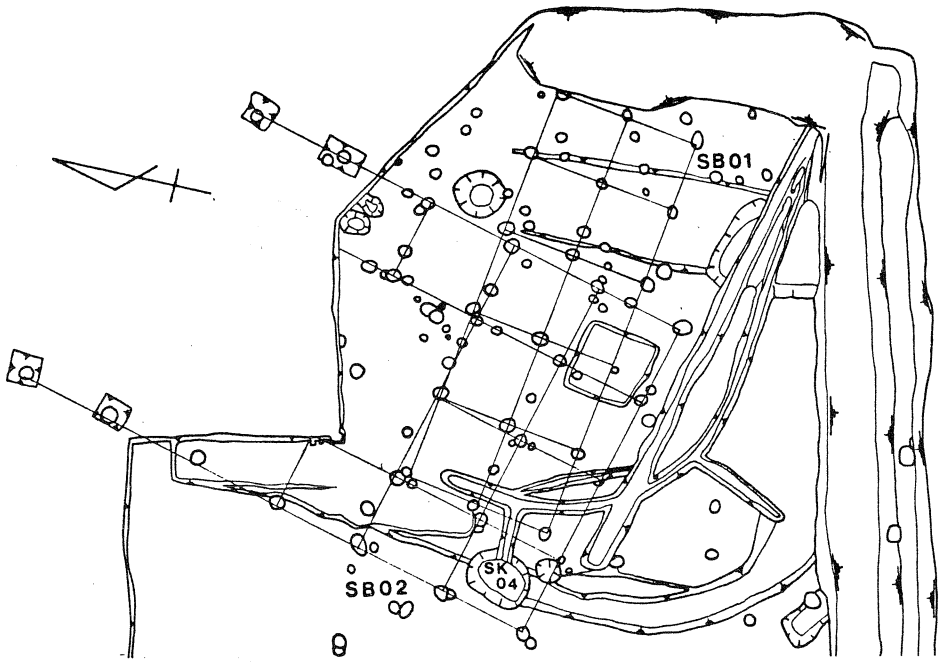
＊Ⅳ区　　Ⅳ区では、西の方でⅢ区の流路の続きを確認しています。流路からは流木が出土しています。また流路から20ｍ東までの間では遺構は希薄です。しかし調査区の東半分では柱穴(はしらあな)を100 ケ所以上確認しています。これらの柱穴の並びから２つの建物があったことが判明しました。

掘立柱建物　　ひとつは５間×２間の建物（ＳＢ０１）で、もうひとつは４間×６間以上の建物（ＳＢ０２）で切り合い関係からＳＢ０２の方が古いことが判っています。

ＳＢ０１　　５間（11.1ｍ）×２間（４.０ｍ）でほぼ東西に向いて建てられている総柱の建物です。この建物の柱穴には、炭化した柱痕跡があるものが認められ、建物が火災にあった可能性が考えられます。

ＳＢ０２　　４間（９.２ｍ）×６間（14.5ｍ）以上で南北方向に建てられた建物です。この建物の南西隅にある土坑（ＳＫ０４）からは、石などと共に須恵器の椀が６点以上、土師器の甕が１点出土しています。

時　　期　　これらの建物の時期は、出土した遺物から推定して平安時代後葉から末葉にかけて（１２世紀）の頃と思われます。



Ⅳ区　遺構平面図　Ｓ＝1/200

＊Ⅴ区　　掘立柱建物（ＳＢ）７棟・土坑（ＳＫ）18基・溝（ＳＤ）・自然流路などが検出されました。

ＳＢ０１　３間（8.5m）×７間（16.4m）で南北方向に長い建物です。柱穴の一部には、柱根が残っていました。また、柱の根元を抜き取り、そのあとに石を詰め、礎石を据えて補修したと考えられるものもあります。この建物の中では、大甕を据えたと考えられる穴が４か所並んで見つかりました。

ＳＢ０２　３間（7.0m）×４間（10.4m）以上の建物です。

ＳＢ０３　東に１間の廂（ひさし）がつく２間×３間と推定される建物です。南北方向に長く、規模は7.5m×9.3mを測ります。

ＳＢ０４　２間（4.1m）×３間（6.5m）の建物で、ＳＢ０１・０２を切っています。

ＳＢ０５　４間（7.3m）×３間（5.1m）以上で、南に半間の廂がつく建物です。ＳＢ０４とほぼ同一の方向をとり、同時期に建てられたと考えられます。

ＳＢ０６　２間×４間の西に廂のつく建物で、7.0m×9.4mの規模です。方向からＳＢ０４・０５と同時期と考えられます。

ＳＢ０７　６間（11.4m）×４間（9.0m）の建物で、ＳＢ０６を切っています。この建物は、Ⅳ区のＳＢ０２と同様に南西の隅の１間×１間のほぼ中央部に隅円方形（すみまるほうけい）の土坑（ＳＫ１０）を伴っています。

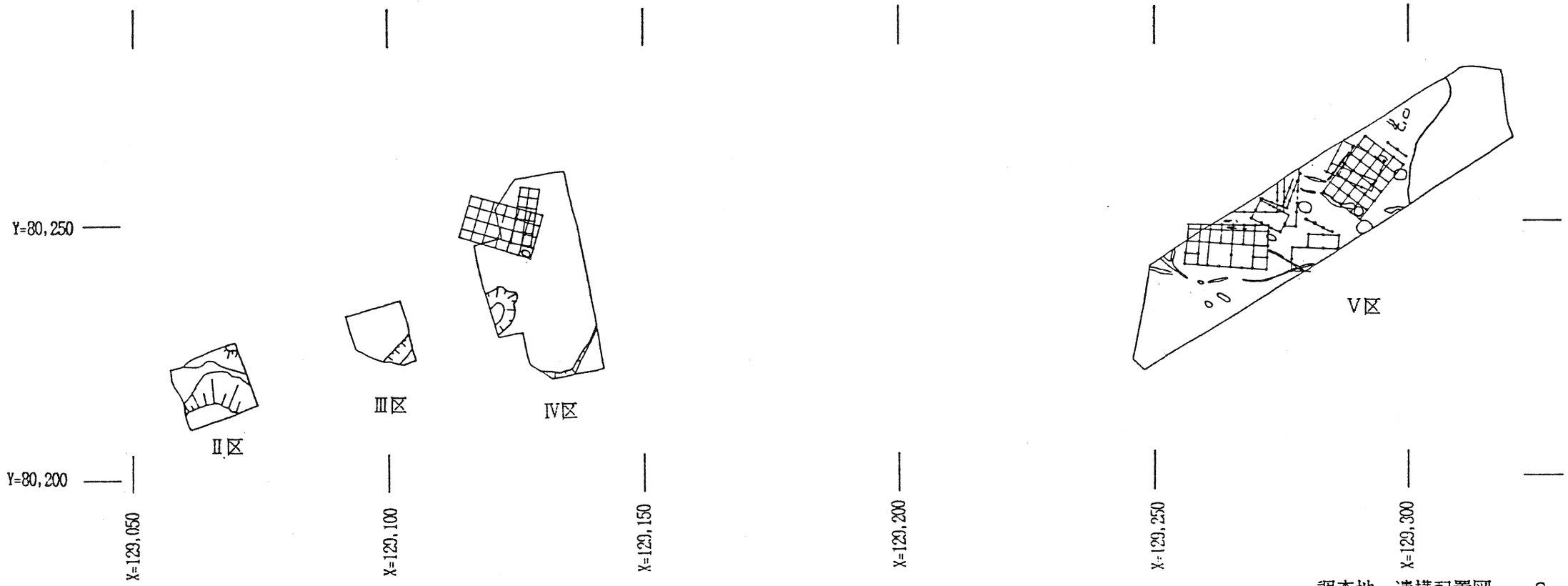
ＳＤ０２　ＳＤ０２は掘立柱建物ＳＢ０３に切られています。この溝からは１０世紀前半頃の遺物が出土しており、これからＳＢ０３をはじめとする建物群の上限を決めることができます。

今回の調査で検出した溝は、おおよそ幅40～80㎝、深さ５～80㎝のものがほとんどです。

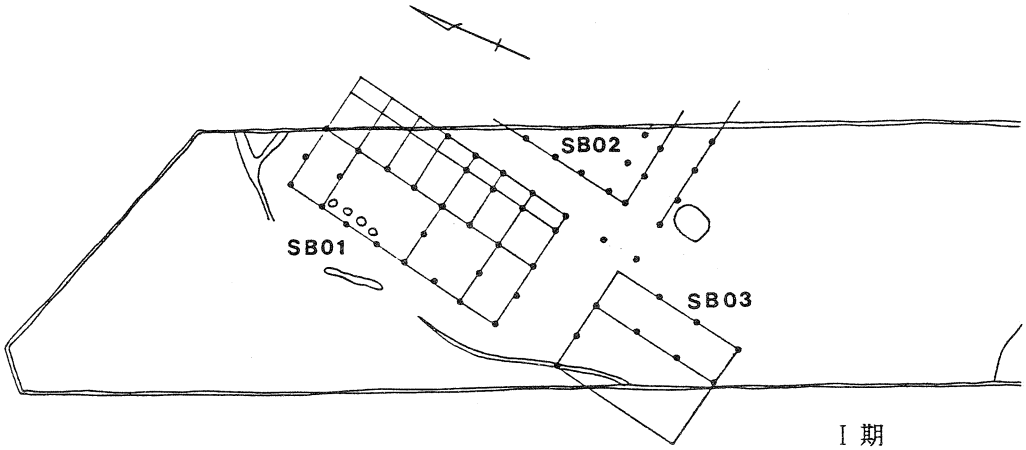
土　坑　ほとんどの土坑は隅円方形で、拳大～人頭大の石が土器とともに投げ込まれたようなかたちで出土しました。石のなかには火を受けたような痕があるものがあり、一部の土坑では炭層が見られます。

時　期　これらの遺構は２時期に分けられ、ＳＢ０１・０２・０３とＳＤ０２は平安時代中葉に、その他の遺構は平安時代後葉～末に位置づけられます。

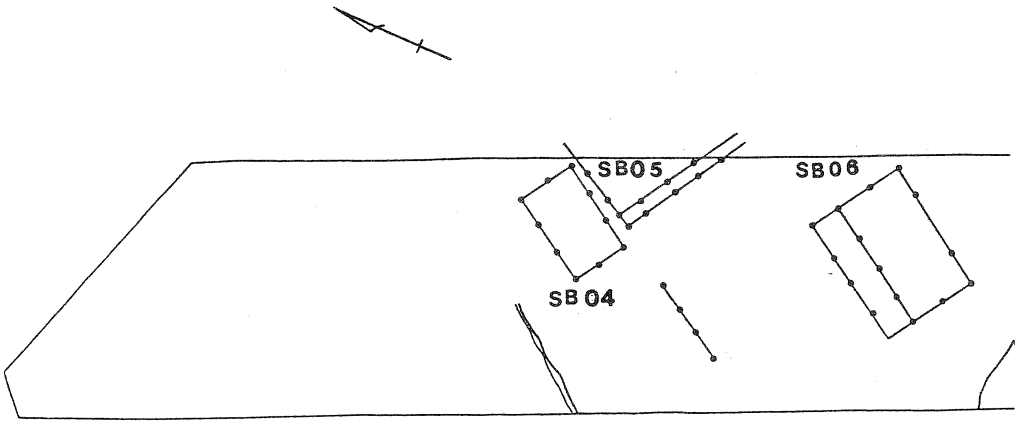
Ⅴ区　遺構平面図　　S＝1/300



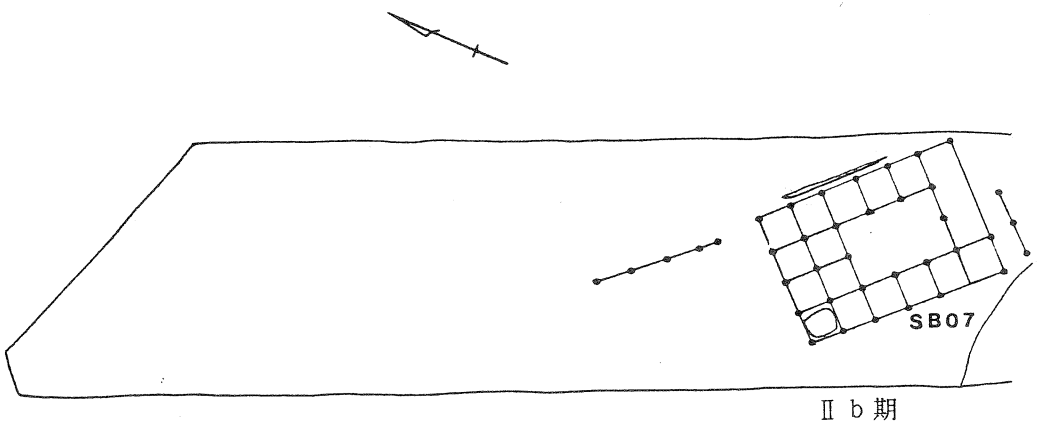
調査地　遺構配置図　　S＝1/1,000



Ⅰ期



Ⅱａ期



Ⅱｂ期

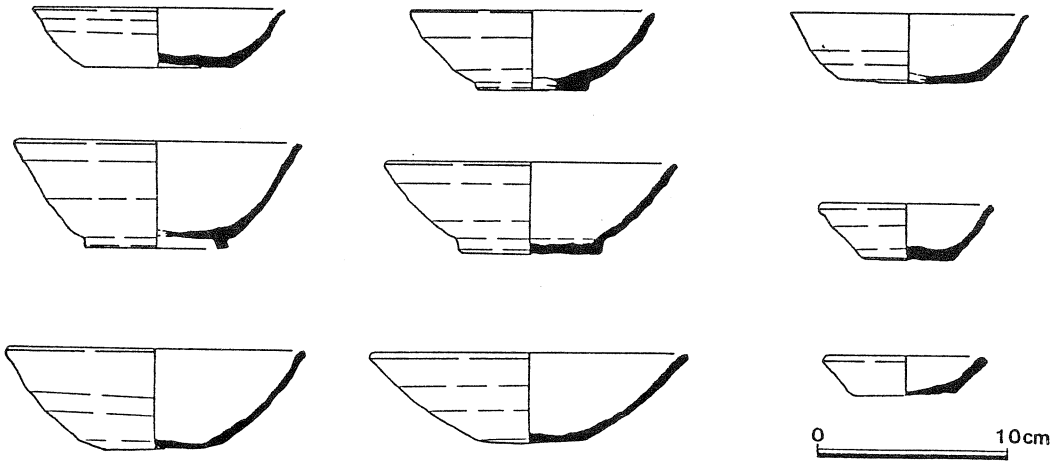
遺構変遷図　　S＝1/500

3．まとめ

今回の調査では、北神地域ではじめて平安時代中葉（10世紀）の建物群が確認されました。その建物の方向、配置には規則性がうかがえます。また、須恵器・土師器のほか緑釉陶器・灰釉陶器・青磁・白磁など出土遺物の種類も多くみられます。

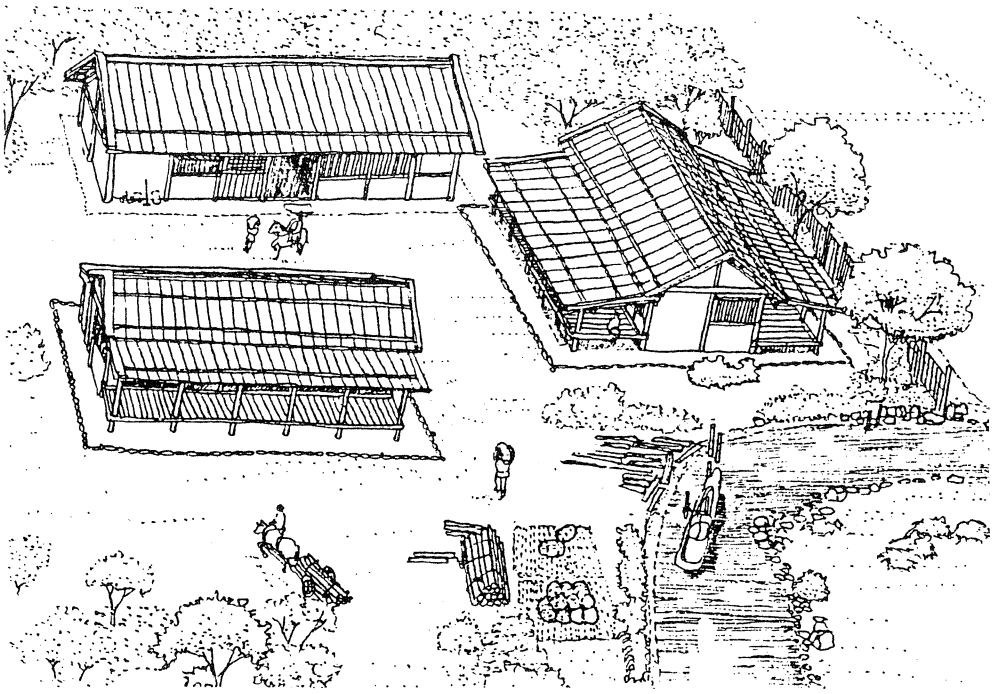
上小名田遺跡では、平安時代の中頃には集落が営まれており、この地域の中心的な集落だったようです。ただ、少量ではありますが　奈良時代の遺物も出土しており、もっと古くから人々が住みはじめていた可能性もあります。吉尾遺跡、下小名田遺跡の調査で平安時代後葉～末葉の遺物・遺構が出土しており、今回の調査結果からみて八多川流域では、平安時代後葉～末葉にかけて村落の分散、拡大が進んだと考えられます。

これからの調査によっては平安時代の屋敷地の全域を確認できる可能性もあり、今後の成果が期待されます。

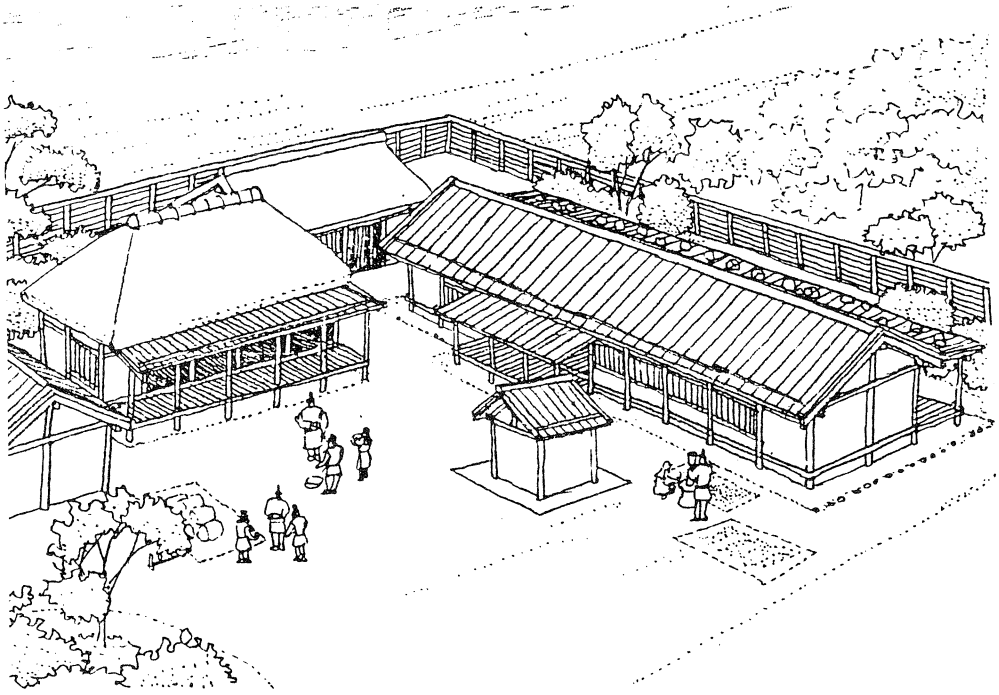


Ⅳ・Ⅴ区　出土遺物

1・2　Ⅴ区ＳＤ０２　3～5　Ⅴ区ＳＫ０９　6　Ⅴ区ＳＫ０８
7　Ⅳ区ＳＢ０２　8　Ⅴ区ＳＫ１０　9　Ⅴ区ＳＫ１



高瀬遺跡掘立柱建物群復元図

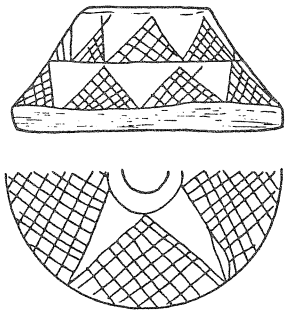


じょうべのま遺跡掘立柱建物群復元図

鬼頭　清明　「古代の村」（『古代日本を発掘する６』）より

生田遺跡

現地説明会資料



昭和63年1月31日

神戸市教育委員会

今回の調査については，神戸市文化財専門委員　檀上重光・宮本長二郎の両先生に御指導をいただきました。

また，マルイト株式会社の協力をえました。

1　はじめに

神戸の市街地は，古くから町並みが整い，遺跡は建物の下になり，ほとんどその存在を知ることはできませんでした。しかし，最近の著しい再開発で東灘・灘・中央区などでも，次々と新しい遺跡が発見されています。中央区下山手通にある当遺跡も，昨年までは全くその存在が知られていませんでしたが，ホテルが建設されることになり，試し掘りをしたところ，地下 0.5～ 1.5mの深さで古墳時代の土器が出土しました。戦前には，生田神社の東側や山本通のあたりにいくつかの古墳のあったことが知られていましたから，周辺にはその時代の人々の集落があるだろうと予測されていた地域です。今回発見されたこの遺跡の名前は「生田(いくた)遺跡」とつけられました。

2　立地と環境

当遺跡は，標高14m前後の緩やかな斜面の上にあります。このあたりの土地は，昔の生田川（元は新神戸駅から市役所の前を流れていました）の氾濫によって堆積した土砂でできた沖積地の上に存在します。

付近で最も古い遺跡は，昨年の夏，新聞等で大きく報道された雲井遺跡です。この遺跡は縄文時代の前期に始まり，その後弥生時代中期まで人々は住み続けたようです。また，新神戸駅の北側の山頂には，弥生時代中期の布引丸山遺跡があります。この遺跡は邪馬台国の時代の倭国の大乱と結びつけて考えられる戦いの村―高地性集落―の一つです。

また，先ほど述べましたが，生田神社の東側の旧生田川沿いには古墳があったようですし，山本通から県庁の

西側にかけても古墳があったようです。しかし，古くに壊されており詳しいことはわかりません。

ずっと西の方では，兵庫区との境付近に縄文時代早期に始まる宇治川南遺跡，縄文時代後期に始まる楠・荒田遺跡などがあります。このあたりで，古墳時代の人々が住んでいたことがわかるのは，今のところ生田遺跡だけです。

周辺の主な遺跡

1	生田遺跡	5	中宮古墳
2	雲井遺跡	6	楠・荒田町遺跡
3	布引丸山遺跡	7	宇治川南遺跡
4	生田町の古墳		

2

3　調査の経過

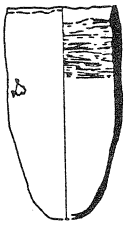
現在発掘調査をしている敷地は，約1,800 ㎡あります。しかし，数年前までは学校が建っていたので，校舎のあった部分は地下深く掘られ，住居跡などは削られて，ほとんど残っていません。運動場のあった北側の2/3 ほどはよく保存されていて，古墳時代の住居や倉庫の跡などが見つかりました。また，当時の人々が使用した土器や鉄の斧（おの）などが出土しています。

4　調査の概要

今回の発掘調査で発見されたものは，ほとんどが建物の跡です。当時の建物には竪穴住居（地面を家の形に掘りくぼめ，柱を建て屋根をかける）と，掘立柱建物（地面に柱を立て，床をつくり，屋根をかける）の２種類がありました。

竪穴住居１

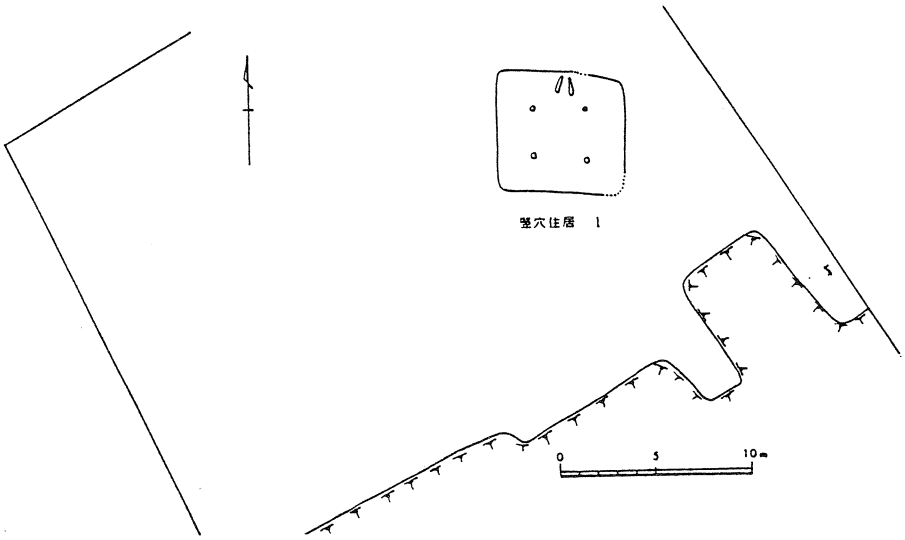
一辺が 6.4m× 6.8mの方形に地面を掘りくぼめて，柱を４本建てています。北側の壁際には粘土で作ったカマドがあります。カマドは，今でも田舎に行くと見ることができるオクドサン，ヘッツイサンと呼ばれるものと同じです。カマドのまわりには，調理に使う甕（かめ）（食物を煮る），コシキ（食物を蒸す），杯（つき）（食物を盛る），高杯（たかつき）（食物を盛る）などがあり，このあたりが台所であったことがわかります。また，細かく割れた製塩土器が，カマドからかき出された灰の中にたくさん混じっていました。製塩土器とは，海水を煮つめて塩の結晶を取り出すのに使われた小型で薄手の土器です。しかし，このカマドで塩を作ったとは考えられず，海の近くで作られた塩を運んでくるのに使った土器をカマドで焼きかためて

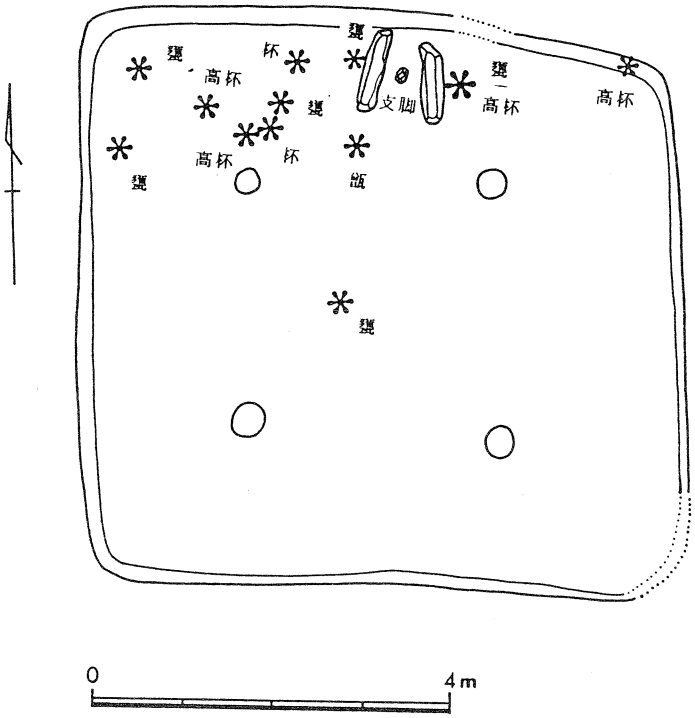


製塩土器（Ｓ＝1/3 ）

（神楽遺跡出土）

散状塩（サラサラとした塩）を作るのに使ったと思われます。住居跡の中に残された土器から，５世紀前半の建物だとわかります。

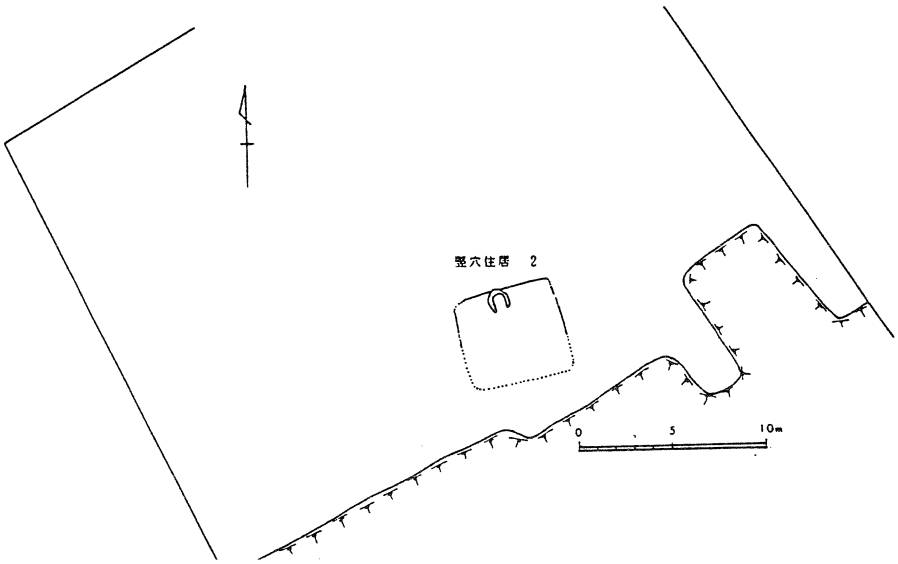




4

竪穴住居２　この住居跡は，あとから掘られた溝や柱穴でこわされ全体の形はよくわかりませんが，一辺約 5.5mの方形であったと考えられます。竪穴住居１と同じく，北側の壁際にはカマドが作られています。幅の大きなカマドで，土器をかけるところが２口あったかもしれません。

住居跡から紡錘車（糸を紡ぐときに使う道具）が出土していますが，土器はあまり残されていませんでした。６世紀初め頃の建物と考えられます。



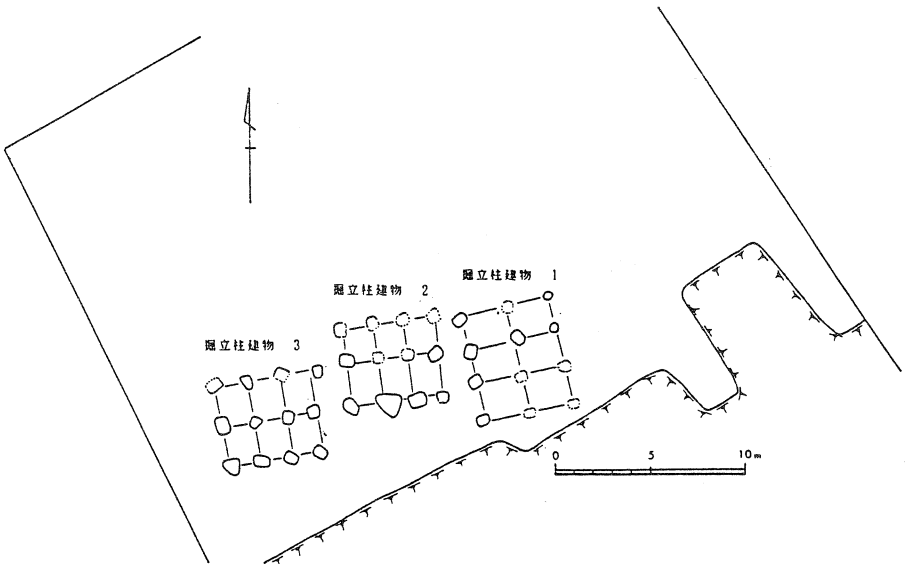
竈（かまど）のある竪穴住居復元図
（大系日本の歴史２　小学館）

掘立柱建物１　柱間が２間と３間（ 5.0m× 5.5m）の建物で，総柱だと考えられます。総柱というのは建物周縁だけでなく，内側の交点にもすべて柱の建てられていることをいいます。一般的には，こういう構造の建物は倉庫と考えられています。

掘立柱建物２　柱間が２間と３間（ 3.5m× 5.0m）の建物ですが，掘立柱建物１とは棟の方向が直角になります。これもまた総柱と考えられますが，新しい井戸があって確かめることができません。

掘立柱建物３　柱間が２間と３間（ 4.5m× 5.0m）で総柱の建物で，棟の方向は掘立柱建物２と同じです。

以上の掘立柱建物１～３は同じ方向に柱列が並んでいることから，同時に建っていた倉庫群と考えられます。



6

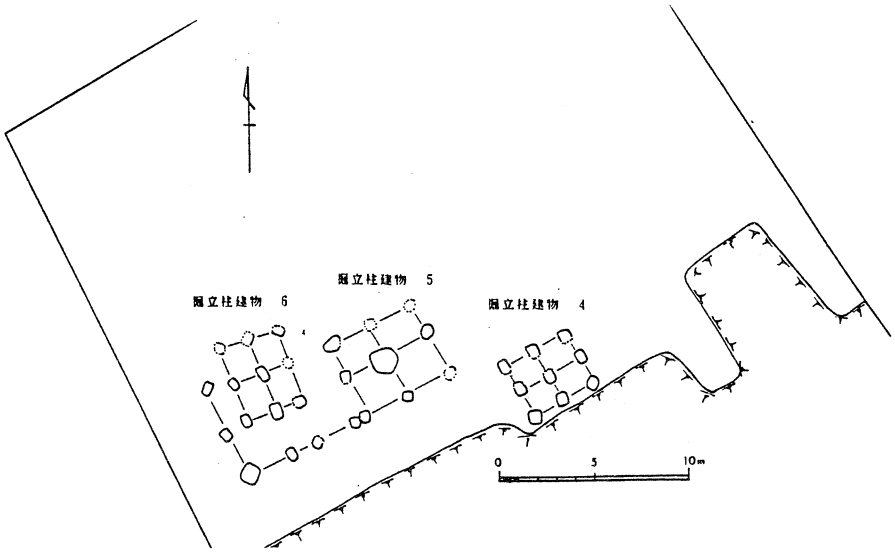
掘立柱建物４　柱間が２間と２間（ 3.0m× 3.5m）で総柱の建物ですが，南の方にのびていた可能性もあります。

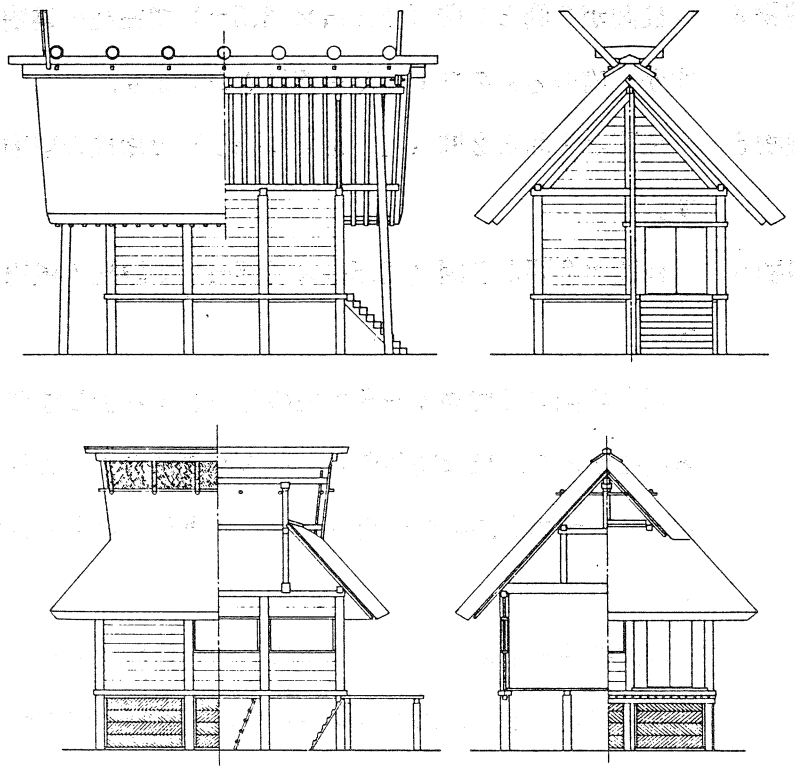
掘立柱建物５　柱間が２間と２間（ 4.0m× 4.5m）で総柱の建物です。

掘立柱建物６　柱間が２間と２間（ 3.5m× 3.5m）で総柱の建物です。

以上の掘立柱建物４～６は先の１～３より少し柱列の方向をかえて，ほぼ同じ向きにならんでいます。これら４～６の建物も同時期に建っていた倉庫群と考えられます。

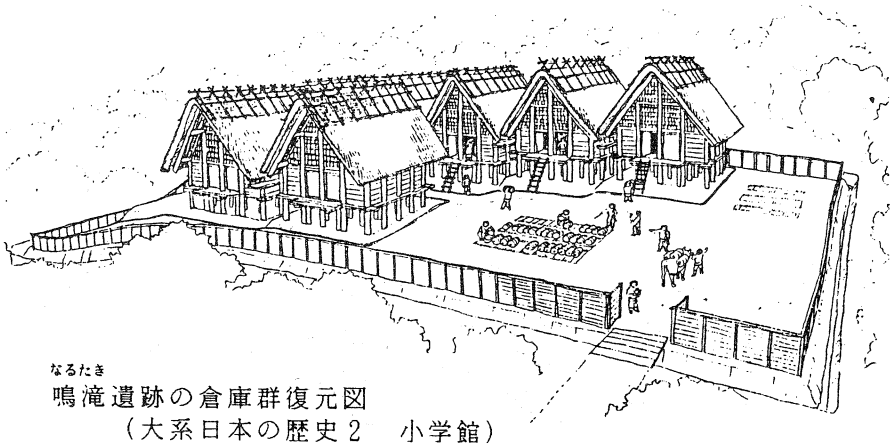
掘立柱建物２の柱穴の一つから，滑石製の紡錘車・有孔円板（銅鏡をまねたと考えられています）・臼玉が出土しており，建物を建てる時にお祭をしたと考えられます。しかし，土器がほとんど出ず，時期の確定はできませんが，６世紀初め頃と考えています。また，掘立柱建物１～３と４～６はどちらが先か不明です。





松野遺跡の掘立柱建物復元図

（宮本　長二郎氏　復元）



鳴滝（なるたき）遺跡の倉庫群復元図
（大系日本の歴史２　小学館）

8

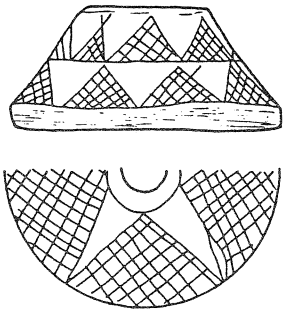
溝　　3条出土しています。中からたくさんの土器が出土しています。先の掘立柱建物と重なっていることから，6世紀初めにはこの溝はなく，出土遺物から6世紀後半に作られ，その終わり頃には埋まったと考えられます。
土器の他には，鉄の斧(おの)が出土しています。

5　まとめ

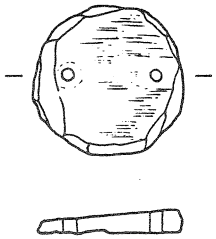
Ⅰ　この遺跡は5世紀前半にはじまり6世紀末頃にはなくなったようです。

Ⅱ　竪穴住居1は，兵庫県下でも最も古い部類に入るカマドをもつ住居で，当時の台所の状態を知る資料となります。

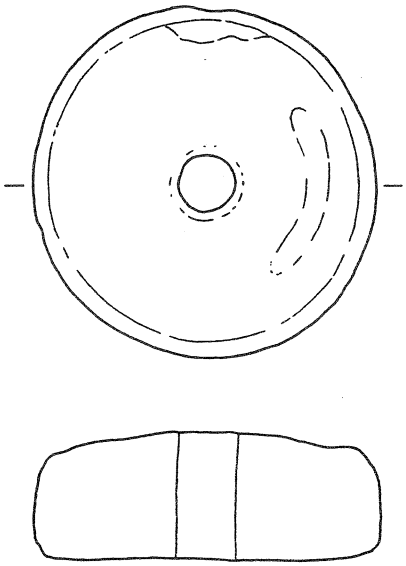
Ⅲ　掘立柱建物は，柱穴が大きく，またいくつかが規則正しく並んでいることから，有力豪族の居館の一部と考えられます。日本書紀の神功皇后の条に記されている「活田長峡国」（いくたながをのくに）を思い浮かべることができます。



滑石製紡錘車



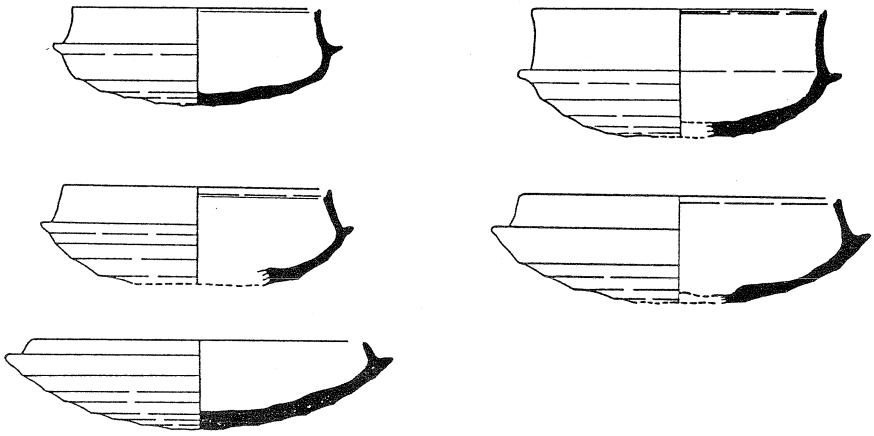
滑石製有孔円板



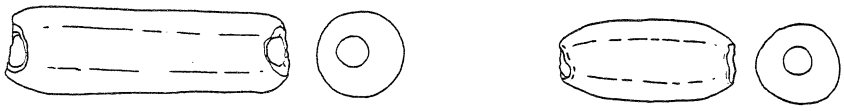
土製紡錘車

出土遺物　S＝1/1

須恵器坏蓋



須恵器坏身



土錘

出　土　遺　物　S＝1/3

10